
ドラえもん のび太のバイオハザード イレギュラーな者たち

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドライモン のび太のバイオハザード イレギュラーな者たち

【Zコード】

Z9652Y

【作者名】

ゼクセル

【あらすじ】

突然現れた黒いコートの男を追いかけたら、異世界へと飛んでしまった星也。しかし、運悪くゾンビだらけの街にきてしまったのだつた。果たして星也はこの街を脱出することが出来るのか!/?ちなみに、この作品は僕のレビュー作です。そして、文才〇です。超駄文です。だから、暇で死んでしまうというときにでも読んでいただけたら光栄です。あと、この作品はマイナーなもの、メジャーなもののがコラボするかもしれません。コラボすると超駄文がさらに酷くなる可能性大です。その時はなるべく温かい目で見てください。

第1話 異世界（前書き）

初投稿です。よろしくお願ひします。

第1話 異世界

皆さん、こんにちわ。僕の名前は才川星也です。まあ、自己紹介はこれくらいにさせてもらいます。え、なぜかつて？なぜなら、現在暴徒化した民間人に追いかけられていますから。まるでホラー映画やホラーゲームにでてきそうなものです。そもそも、なぜこうなってしまったのでしょうか？少し時間をさかのぼつて見ましょう。

確か、僕は夏なのに真っ黒なコートを着ている男を怪しいと思い追いかけてました。そして、その後その男は……そうだ！黒い渦を空間に作り出してその中に入つていったんだ！僕はその中に興味本位で入つて……気がついたら此処にいたんでした。それで、あの暴徒化した民間人が出てきて襲いかかってきたから逃げて……現在に至ります。

星也「畜生　！どうなつてるんだこの街　！」

星也は声が街中に響いた気がした。

第1話 異世界（後書き）

意見、感想お待ちしています！

第2話 倉庫（前書き）

今回もよろしくお願ひします。星也の能力がほんの少し出でます。

第2話 倉庫

ずっと逃げてるのが嫌になつた星也は倉庫らしきところへ隠れるようにして入つた。

星也「とりあえず必要になりそつなものを探しましょ。」

星也は倉庫の探始めた。すると、

星也「これは…ハンドガン！？しかも外国産のブラックティルだ。どうしてこういったものが…？」

星也は日本にあるはずのない外国産の銃を見つけ、驚いている。なぜあるのか疑問に思つたが、

星也「ま、いいか。この状況では持つていたほうがいい気がします。」

「星也はとりあえずハンドガンのことについて考えるのをやめた。結局、その後はハンドガンの弾、非常食くもちろんのこと、ゾンビ（今の星也にとっての暴徒化した民間人）のお出迎えである。

星也「人は殺したくないが…仕方がない！正当防衛です！」

そう言ってどこから出したのか手には刃のついた銀と赤色のチャクラムが握られていた。そして、星也はそれを持ってゾンビ達にむかつしていくのであった。

第2話 倉庫（後書き）

次回は星也のプロフィールです。引き続き意見、感想お待ちしています。

主人公紹介（前書き）

星也のプロフィールです。少し修正しました。

主人公紹介

才川 星也
さいかわ せいや

身長	172cm
体重	55kg
年齢	16歳
性別	男
性格	・ 冷静 ・ 照れ屋 ・ 他人第一 ・ 時々腹黒い

誕生日 12月25日

好きなもの

・ アイスクリーム

・ お菓子（主にチョコやキャラメルといった甘いもの）

・ 天体観測

・ 他人を大事にする人
・ 努力する人

嫌いなもの

- ・ 生クリーム
- ・ なすび
- ・ ぎんなん
- ・ 他人を大事にしない人

外見 デュラララ！！にててくる紀田正臣を赤髪、赤目にした感じ

この作品の主人公。常に冷静沈着で仲間思いだが他人を大事にしない者だと相手を「ゴミ」と同じような扱いになる。ある事情で0～6歳の記憶を失っている。恋愛にとても鈍感。

身軽で味方も敵み翻弄する動きが得意。近接系の武器ならなんでも使える。

能力

- ・自由にチャクラム（キングダムハーツ？のアクセルと同じもの）を出したり、消せたりできる。

もう一つ能力があるがまだストーリーにでてきていなため秘密です。

主人公紹介（後書き）

引き続き意見、感想お待ちしております。

第3話 野比のび太（前書き）

原作主人公登場です。そして、オマケ…やつちゃいました。ま、そういうキャラにする方針なのでお許しを。

第3話 野比のび太

5分後10体くらいいたゾンビを一掃していた。

星也「なんか…肉が腐ってる?本当に生きている人間だつたのか…」

星也はゾンビの死体を見て思つた。…てか今更?

星也「……どこに行けばいいのだろうか?」

星也はどうするか考えた。そして、1つの結論にたどり着いた。

星也「……避難所を探そう。」

そう言つたのはいいがどこに行けばいいか分からぬ星也。迷つた

そのとき、

ギイイイイイ

後ろの倉庫の扉が開いた音がした。星也は軽く飛び、倉庫の扉と距離をとつた。しかし、いたのはゾンビではなく

星也「…生存者か。」

そう言つてチャクラムを下げ、消した。

?「生存者ですか。あの…一緒に行動しませんか?」

頼んできたのは黄色の服を着ていてメガネをかけた小学生くらいの男の子だ。

星也「別に構いません。ところで、どこへ行こうとしていたのですか?」

?「(年下に敬語?)えつと…避難所になつてゐる小学校です。」
その言葉を聞いてラッキーと星也は思つた。避難所を探す問題が解決できたからだ。

星也「分かりました。では同行させてもらいます。」

星也はそう言つた。

?「あの…お名前は?」

星也「僕?僕はオ川星也。星也と呼んで貰えたら光栄です。」

?「僕の名前は野比のび太です。」

お互いの自己紹介が終わり、小学校へ歩いていった。

オマケ

あれ、ここどこ？どうしてこんな火事になつてる家の前で寝ていた
？なんだれ？ええ！？ゾンビ！？
な、なんで現実に！？わ、わあ！カ、カラスまで！？と、とにかく
逃げよう。あと、言っておくことが
「上から来るぞ！きをつけろ！」
そう言つて俺は走つた。風となつて……

第3話 野比のび太（後書き）

次回オリキャラ一人、コンピューターゲーム『怪異症候群』から一人出します。『怪異症候群』が分からない方は少し調べてみてください。

第4話 生存者（前書き）

あとがきのほうで何かやろうつかな？

第4話 生存者

学校に入った星也とのび太。

のび太「どうします？」

星也「まず近くの部屋から入って行きましょう。」

そう言って星也は生徒玄関から一番近い「保健室」の扉へと手をのばす。

ガラッ

? 「だ、誰だ！？」

星也が扉を開けると中にいたオレンジ色の服を着たゴリラみたいな男の子が金属バットをこっちに向けてきた。

星也「落ち着いてください。僕たちは生存者です。」

? 「…そつみたいだな。悪かつたな。」

星也が「ゴリラみたいな子にそう言ひとその子は金属バットを下げ、納得してくれた。その間にのび太が保健室に入っていた。

のび太「ジャイアン！それにみんなも！」

? 「のび太さん、無事だったのね。」

? 「のろまなお前がよく生きてたな。」

のび太「……」の人達は?」

ジャイアン「とりあえず、ここに避難してきた人達だ。」

のび太は友達と会えて安心の表情を見せた。ジャイアンはここにいる人はみんな避難してきた人だと言った。星也はそののび太達のやりとりの間に生存者の数を数えつつ、どんなような人か把握していた。

星也（小学生が5人、中学生が1人、同じ年齢の女性が2人、50代の大人1人、自分を含め10人か。ん、待てよ、さっきいたのって……）

星也が生存者を数え終わつたところでふとある人のことを考えた。そのときに、

? 「……もしかして、星也君？」

星也「美琴さん？」

美琴「やつぱり、星也君だ！」

美琴は星也と会えて飛んで喜んだ。

ジャイアン「2人知り合いでですか？」

星也「はい。同居している人です。」

のび太「同居?」

星也「はい。美琴さんはある事件をきっかけに1人になってしまったんです。僕は1人暮らしだったので、部屋を貸してあげてるんです。」

星也がそう説明するとその場にいる全員が納得した。

星也「あ、紹介が遅れました。僕は才川星也です。星也と呼んで貰いたい。」

？「私は源静香よ。」の学校の6年生です。」

？「僕は骨川スネ夫。」

ジャイアン「俺は剛田武。みんなからはジャイアンって呼ばれている。」

のび太「僕は野比のび太です。」

？「僕の名前は出木杉英才です。彼らと同じ6年生です。」

？「……中一の白峰。」

？「私は桜井咲夜よ。よろしくね。星也君。」

？「私は町内会長の金田正宗様だ。」

星也（なんだ?）の人?）

けつこうシリースな感じでみんな自己紹介をした。そして、ジャイアンが何か言おうとしたときに、

?「なんだー？」の学校はー？』

といつ声が聞こえた。なんだー？と言われてもただの学校です。

?「せつかくだから俺はこの赤い扉を選ぶぜ。」

その声が星也達がいる保健室前から聞こえた。みなさんもう分かりますよね。前回オマケに出ていた彼です。

星也（あいつもきてたのか。）

星也はもつ誰か分かつたようだ。

?「ジャジャーン」

ガスツ

?「うづえつ。」

謎の男がいきなり効果音をつけ、入ってきた。入った途端に星也に蹴られた。

星也「誰もいなかつたら、やりたい放題ですね、秀人。」

秀人「だからつていきなり蹴ることないじゃん。」

星也「見苦しかつたのでつい…」

星也と秀人がそういうやりとりをしてると、

出木杉「知り合いでですか？」

出木杉は星也に質問した。

秀人「わたしか？わたしは中村秀人。探偵さ。」

星也「彼は中村秀人。」

秀人「そして、またの名をモンキー・D・ヒーテト。」

星也「厨二病末期の患者です。」

やりたい放題の秀人をスルーして秀人を紹介する星也でした。

第4話 生存者（後書き）

すみません。分からぬネタばかりですよね。
意見、感想お待ちしております。

第5話 アヒツテイー（前書き）

今日は分かりづらいです。すみません。

第5話 アビリティー

秀人含めみんなの自己紹介が終わつた。

秀人「つーかさ星也、わたしの紹介酷くない? 厨二病末期の患者とか…」

星也「事実じゃないですか。」

秀人「そんでもひでーよ。」

秀人は星也に自分の紹介が酷いと言うが星也は事実と言い返す。さつきから美琴の顔が赤い。それに気づいた星也は、

星也「美琴さん、大丈夫ですか? 顔赤いですよ?」

美琴「え? あ…だ、大丈夫。」

星也は美琴に質問をした。美琴はそれに大丈夫と答えるがまだ顔が赤かった。いや、さつきよりも顔が赤くなっていた。

秀人「…美琴、星也、ちょっとついてきてくれ。」

出木杉「どこに行くのですか?」

秀人「トイレ。お前らはトイレの扉の前で待つててくれ。」

星也「分かりました。」

美琴「いいわよ。」

秀人がトイレへ行くと言つて星也と美琴にトイレの前で待つてもらうよう頼んだ。星也と美琴はすぐに承諾した。しかし、秀人は保健室を出るとトイレへ行かず空き教室に入つた。星也と美琴はついていつたが美琴はなぜだか分かつていなかつた。星也は分かつたようだつた。

秀人「…おい、この状況どう思う?」

美琴「え? 街の人達がゾンビになつて襲いかかってきてるのじゃあ…」

星也「え? ゾンビだつたのですか? やっぱりあれ? 良かつた。てつきり人を殺してしまつたかと…」

秀人「お前…やつぱり鈍感だな。いや、わたしが言いたいのはそんなことじやない。」

星也「…なんで『ドラえもん』の世界の星に来たか…ですよね、秀人が言いたいのは。」

美琴「?」

秀人が聞きたいことを星也が代弁した。美琴は全く分からぬようだ。

秀人「星也! ? 気づいていたのか! ?」

星也「気づくもなにもそつとしか考えられないじやないですか。『ススキヶ原』という地名、『野比のび太』とその仲間達4人、それ

らを考えたらそうとしか考えられないですよ。」

星也が根拠となることがらを述べ、説明する。

美琴「ち、ちょっと待つてよ星也君。いくら何でもアニメの世界は有り得ないよ。」

星也「…パラレルワールドって知っています? 美琴さん。」

美琴「え? 平行世界って意味じゃあ…」

星也「そ、う。言い方を変えたら「もしも」の世界です。「もしも」っていうことはいろんな可能性が無限大にあります。先ほどでた星の話も同じようなものです。一つ一つの星にそれぞれの世界が無限大にあります。僕たちのいた世界もその中の一つです。そして、この世界も例外ではありません。それはアニメがどうとかの話ではありません。実際に存在していますから。」

美琴は秀人と星也の考え方を否定していたが星也の説明を聞いて信じられないが納得した。

秀人「問題はなんでこっちの世界に来たか…だな。」

美琴「どういうこと?」

星也「確かに星一つ一つにいろんな世界があるけど、普通では自分達以外の世界に移り住むとか干渉はできないんです。」

秀人が提示した問題に美琴は質問した。星也はその質問に答え、美琴は納得した表情だった。

美琴「じゃあどうしてうちの世界にきたの？」

秀人「きたんじゃない。誰かにつれてこられた。」

美琴「どうにつけた？」

秀人「こっちの世界にくる前に白い空間に包まれたのが記憶にある。そんなの怪奇現象でも聞いたことがない。そう考えると誰かの力によつてつれて来られたという線が妥当だ。」

美琴「そう言えば私も…」

星也「僕は君たちと違つけど、誰かの力によつてつれて来られたのは確かみたいですね。」

秀人は自分達がこっちの世界に来たのは誰かの力のせいだと考えた。その考へに星也と美琴は賛同した。

美琴「でも、普通なら他の世界に行けないんだよね？そんなことが…」

星也「できます。普通にとらわれない能力「アビリティー」なら。」

美琴「アビリティー？」

星也「美琴でいう「怪奇を感じる力」と「怪奇の力を弱くする力」、「悪意のない怪奇を味方にする力」のこと。僕でいう「チャクラムを自由に出したり、消せたりする力」です。常識じゃあ有り得ない力のことです。」

星也はアビリティーについて美琴に説明した。

秀人「そろそろ戻ろうか。みんな心配するだろ？し。」

美琴「あれ？トイレは大丈夫なの？」星也「心配ないでしょ。もとからこの話をするために僕たちをつれて保健室でたんですし。」

美琴「そうなの？秀人君？」

秀人「星也、こんなときには鋭いな。まあ、そうだな。あと、今の話はみんなにするな。今のみんなだと混乱を招くだけだ。」

星也「分かつていてる。」

美琴「はい。」

「こうして、3人は保健室に戻つていった。

オマケ

教室を出た3人。

秀人「ほら、早く行くぞ。」

星也「分かつている。」

美琴「ちょっと待つてよ。…あ！」

秀人の言葉を聞いて急いで美琴は足を滑らせてしまった。美琴の体が後ろへと倒れていく。美琴は目を瞑つた。後に倒れるのを覚悟

して。しかし、いつまでたっても床に体があたる感覚がこない。

美琴（あれ？）

おかしいと思った美琴はそーっと目を開ける。すると目の前には星也の顔があった。そして、腕を肩と腰にまわし美琴の体を支えていた。

星也「大丈夫ですか？」

美琴「あ、えつと…／／／だ、大丈夫／／／」

星也に美琴は大丈夫と言つも顔が真っ赤であった。

星也（顔真っ赤だけじ本当に大丈夫か？風邪でもあるんじや…）

星也と美琴のやりとりをみていた秀人は鈍感すぎる星也に呆れていった。

秀人（…いいかげん気づけよ。）

それでも美琴が星也のことが好きなことに気づかなかつた星也であった。

第5話 アヒリティー（後書き）

第10話からあとがきで何かやります。何かは秘密です。

第6話 行動（前書き）

今回はまだ普通な話です。

第6話 行動

保健室に戻った3人。

ジャイアン「遅かったですね？どうしたんですか？」

秀人「いや、ちょっとゾンビに襲われてな…」

秀人はジャイアンの質問に嘘を言った。

咲夜「災難だつたわね。」

星也「はい。」

星也が咲夜の発言に対しそう答える。すると秀人は咲夜のほうへ歩いていった。

秀人「あの…咲夜さん。この状況が終わったら、一緒にお茶でもどうぞ」と
「うふふ。」

秀人が咲夜をナンパしようとしたところで星也の鉄拳が秀人の腹に決まる。

星也「それは死亡フラグです。さらにこの状況でのナンパはやめてください。」

星也はそう言いながら秀人の服の襟を掴み、もとの場所へと引きびつっていく。

星也「すみません。この人女タラシなんで綺麗な女性を見るとすぐこうなるんですよ。」

咲夜「綺麗な…女性？／／／」

星也の言葉を聞いて咲夜は顔を赤らめた。

星也「それよりどうするのですか？ずっとここにいるわけにもいかないでしょ？。」

出木杉「そのことなんですが、裏山にこもってこの事態の終息を待つことにしました。」

のび太「そこで街にいろいろ取りに行く班と学校の探索班をそれぞれ2つと3つに分けようと思っているのです。」

星也の質問に出木杉とのび太が答えた。

星也「つまり、2人1組ということですね。」

星也がそう訪ねると出木杉がうなずいた。そして、みんなで相談した結果こうなった。

・学校探索班

出木杉・白峰組

咲夜・静香組

星也・のび太組

・必要物資調達班
ジャイアン・スネ夫組

秀人・美琴組

・無職、引きこもり

金田正宗

こんな感じでチームをわけた。

秀人「そつ言えば、通信手段はどうするんだ？」

静香「確かにこのままじゃあバラバラになるかもしだれませんね。」

星也「携帯電話を使えばいいんじゃないですか？職員室にあるかもしだれませんし……」

出木杉「それです！みんなでケータイ使いましょう。」

通信手段をどうするかという問題がでたが、星也の発言によりみんなでケータイを使うことにきつた。

星也「じゃあ、僕のアドレス渡しておきます。ケータイを手に入れたら、メールでも電話でもしてください。」

秀人「じゃ、わたしのも。」

美琴「私のも。」

咲夜「私のアドレスよ。」

星也はケータイを手に入れたらすぐ連絡できるようにアドレスを渡

した。ケータイを持つている人も星也と同じようにアドレスを渡した。

星也「それじゃあ、散開です。」

星也がそう言つとそれぞれ行動を開始した。

オマケ

星也「あ、剛田君。何か甘いお菓子あれば持ってきて貰いたいんだけど。」

ジャイアン「なんですか？」

秀人「こいつは甘党なんだよ。星也曰わく、いつもお菓子を携帯しないと落ち着かないらしいんだ。」

星也「本当にお願ひします。」

ジャイアン「わかりました。あつたら持つてきます。」

星也「ありがとうございます。」

スネ夫「どんなのがいいの？」

星也「チョコとかキャラメル類ならなんでもいいです。」

スネ夫「わかりました。」

こんな状況でもお菓子が欲しい星也でした。

第6話 行動（後書き）

次回はバイオグラスの前までいきたいです。そのため、読み物は省略するかもしれません。

第7話 探索【1階】（前書き）

無理矢理です。途中説明だけのところがあります。あとがきである
コーナーを始めました。

第7話 探索【1階】

保健室を出た星也とのび太。

のび太「まずは職員室ですね。」

星也「そうですね。のび太君のケータイを取りに行かなればなりませんから。」

まず職員室に向かった2人。行くときには何も出なかつた。しかし、職員室に入つてのび太がケータイを取つて、資料室の鍵を取ると、ガシャーン

窓を割つてゾンビ犬が2体入ってきた。星也はすぐさまチャクラムを出し2体のうちの1体に投げた。ゾンビ犬は首が切断され、絶命した。切断するとチャクラムは星也の手もとに戻ってきた。すぐさま星也は反対を振り向いたがもう1体はのび太がハンドガンで倒していた。

のび太「すごいですね。そんなすぐ倒せるなんて。」

星也「のび太君こそ撃ち抜きのスピードはゴルゴ並みですよ。」

ゾンビ犬を倒した星也とのび太はお互いにほめあつた。

のび太「そう言えば、なんで星也さんいつも敬語なんですか?」

星也「昔からのクセ…でしょう。まあ、そんな感じです。」

のび太の問いに対しても星やはそんな風に答えた。2人は職員室を出

て資料室へ向かつた。資料室の鍵を開けて部屋を探索した。

星也「……なんで小学校に銃弾があるんでしょうか？しかも手榴弾まで……」

のび太「星也さん、こっち側の探索終わりました。」

星也「分かりました。そちらに行きます。」

星也も探索が終わったのでのび太のほうへ行く。

星也「そちらでは何かありましたか？」

のび太「こっちではグリーンハーブと警備員の心得がありました。」

星也「警備員の心得？少し読んでもいいですか？」

【黙読中】

星也「……やつぱり分かりません。」

のび太「ですよね。僕もやつぱりでした。」

星也とのび太は警備員の心得を黙読してみるも全く分からなかつた。星也は自分の見つけた物をのび太に言った。やはり、のび太も銃弾が学校にあることを変だと考えた。次に家庭科室に入るも使えそうな物はなかつた。次はその隣の調理室へと足をのばした。中に入つていくと調理員のおばさんが歪んだ顔つきになつて死んでいた。ちなみに調理室にはパスコードAという2桁の番号の紙を見つめた。そして、調理室の中にあつた小部屋へと扉を破壊して入つた。…え

?どうやって破壊したか?星也が金属の棒を持ってきて叩き壊しました。それのせいで金属の棒が曲がってしまいました。その小部屋に入つていいくと、

のび太「はる夫!はる夫じゃないか!」

はる夫「うう…のび太か…。」

のび太「はる夫どうした!?その肩の傷!?」

はる夫「の、のび太あ…氣をつけろ…た、体育館には化け物が…」

ガクッ

のび太「はる夫!?」

星也はのび太とはる夫の会話が終わると首筋に手をあてる。

星也「…死んでいます。」

その言葉にのび太は悲しい顔をした。

星也「友達だつたのですか?」

のび太「はい。野球仲間でした。」

星也の質問にのび太はそう答えた。星也ははる夫のそばに机の上にあつた花を添えた。

星也「ごめんなさい。これがいまできる精一杯の供養です。」

星也はそう言つと両手をあわせた。のび太も星也にならつた。

星也「…しかし、この傷はどう考へてもゾンビのものではないですね。」

のび太「そ、言えばはる夫が「体育館には化け物が…」て言つてました。」

のび太のその言葉を聞いた星也は、

星也「体育館には僕一人で行きます。のび太君は保健室で待機してください。」

のび太「ええ…? どうしてですか! ?」

星也「はる夫君の傷からみて相手は大型のものと考へられます。だから、のび太君は危険だから保健室で待つていてください。」

のび太が聞いてきたことに對して星やはうとう答へ、保健室で待つているように促した。

のび太「嫌です。星也さんにだけ危険なことをさせられません。小学生で頼りないかもしだせんが僕も行きます。」

そののび太の話を聞いた星やは、

星也「…分かりました。僕と一緒に体育館に行きましょう。」

そう言つと星也とのび太は調理室を出てのび太の案内で体育館に走つていった。3分で体育館についた。ついたら、

バンッ バンッ

体育館から銃声が聞こえた。

星也「のび太君！行きますよ！」

のび太「はい！」

星也とのび太は走つて体育館に入つていった。

第7話 探索【1階】（後書き）

星也「みなさん、こんちは。今日からこのあとがきで『星也の人間観察コーナー』を始めさせて貰います。読者のみなさまよろしくお願いします。とは言つてもこの小説の登場人物にインタビューさせていただくだけですが。最初のゲストは野比のび太君です。」

のび太「はい、何の用ですか？」

星也「少しインタビューさせていただきます。まず、趣味はなんですか？」

のび太「寝ることです。」

星也「……。次にこの街を出たら何をしたいですか？」

のび太「風呂に入つて寝たいです。」

星也「……なるほど、寝ることが好きなんですね。少し意外です。最後に作者からの質問です。好きな人はいますか？」

のび太「え……そ、それは……し、失礼しました。」

ビュウ

星也「速い……。どうやら最後の質問はのび太君にとつて答えづらいみたいですね。それではこの辺で。また会いましょう。」

第8話 バイオグラス（前書き）

はる夫「おい、ゼクセル！」

ん？ なに？

はる夫「なに？ ジャねーよ！俺の登場シーン短すぎだ！」

そんな」と言われてもね……ストーリー上の問題だからね……

秀人「スピードイーログアウトマジワロタ。」

はる夫「あんたは黙つとけ！」

秀人「ほう、年上にその口調か。OSHIOKIが必要だな。くら
え！ボンバー・タックル！」

はる夫「ぐわあああ…」

のび太「なにやつてるんですか。あの3人？」

咲夜「知らないわよ。さあ……」

星也・美琴「始まります（るよー）」

星也「ハモりましたね。」

美琴「う、うん…／＼／＼

秀人「リア充爆発しろ！！」

第8話 バイオグラス

走つて体育館に入つた星也とのび太。そこには…

のび太「出木杉！それに白峰さんも…」

出木杉「のび太君。星也さん。」

白峰「無事だつたか。」

のび太は出木杉と白峰を見つけると歩いていく。

星也「なんですか？今の銃声は？」

出木杉「そ、それは…！…のび太君、後ろ…」

のび太「え？うわあ！」

星也の質問を答えようとした出木杉はのび太に呼びかける。のび太は間一髪なにかをよける。そのなにかは床に突き刺さった。一同驚きのあまりに声がない。そして、現れたものは…

ズンッ

ギィヤオオオ…

現れたのはカメレオンが数倍大きくなつたような巨大な化け物だった。

星也「な、なんだ！？これは？」

のび太「で、でかすぎる…」

星也とのび太は化け物のでかさに驚いているとカメレオンは姿を消した。

のび太「き、消えた！？」

星也「いや、たぶん周りの景色と同化しているだけです。」

出木杉「どちらにしてもほとんど同じです。」

星也は相手の能力を分析した。出木杉はあまり変わりないと黙つているが、星也にはどう対処するかはもつと考えていた。

星也「出木杉君、のび太君、白峰君体育館から逃げてください。」

出木杉「し、正気ですか！？あんな化け物を一人で相手をするつもりですか？」

星也「はい。しかしうるさいと音が聞き取りづらいので。」

白峰「なるほどな。」

星也の発言に出木杉は驚いた。星也はそれに補足を入れると白峰は納得した。そして、3人は体育館の外へ逃げようとしたら

星也「そこだ！」

そつ言いチャクラムを投げるとなにかがチャクラムに刺さりその勢いで床にも刺さる。なにかはあのカメレオンの舌だった。

星也「帰れ。」

星也は懐に入り込みうすく黒い笑みをうかばせ言うと同時にカメレオンの腹を蹴り飛ばす。カメレオンは吹っ飛んで体育館の壁に直撃する。それを見ていた3人は呆然としていた。カメレオンは体育館の壁を突き破つて逃げていった。カメレオンが逃げるとき3人は近寄つてくる。

のび太「す、すごいですよ。あんな化け物を蹴り飛ばすなんて。」

出木杉「ほ、ほんとですよ。」

白峰「あの化け物吹っ飛んでたぞ。」

3人はそれぞれ星也を賞賛した。

星也「なんか力を入れて蹴つてみたら吹っ飛びました。僕もびっくりです。最初は音で相手の位置を知つて闘うつもりでしたけど。」

星也自身もとてもびっくりしていた。星也自身も含め4人は気づいていなかつた。星也がカメレオンの腹を蹴ると足に黒いオーラがあつたことを。この時から星也の「悪魔」としての覚醒が始まつていた。

出木杉「そういうえば、先ほど剛田君から電話があつて「1回保健室に集まつてくれ」と言つていました。」

出木杉がそう言つと

白峰「確かに体育館にこんな鍵がありました。」

白峰はなにかの鍵を渡してくれた。

星也「これは…」「防火シャッター 2階」の鍵?」

のび太「たぶん、2階の防火シャッターを開ける鍵だと思います。」

星也は頭に?マークをうかばせた。のび太はどこの鍵かを言つてくれた。

出木杉「制御室で操作できたはずです。行ってみましょう。」

星也達は制御室へと向かった。体育館前の廊下の通りにあったのですぐついた。中に入ると鍵を差し込むらしき穴があつた。そこへ差し込むと

ピーッ
という音がした。

出木杉「これで2階にも行けるはずです。」

出木杉がそう言つも

星也「まだ3、4階がなんもなつてないみたいですが…」

出木杉「おそらく、3、4階の防火シャッターの鍵はべつにあると思ひます。」

星也「理解しました。」

出木杉は星也の質問にそつ答える。星也は納得した。

星也「それでは戻りましょうか。」

星也達は保健室へと戻るのだった。

第8話 バイオグラス（後書き）

星也「さあ今回の人間観察コーナーは中村秀人です。」

秀人「オス！おらひde！」

星也「まず1問目です！趣味はなんですか？」

秀人「ちょ、最後まで言わせて！まあいい。えーと趣味はゲーム、アニメ鑑賞にニコニコ動画を見る！」

星也「流石厨二病の鏡です！もは末期のレベルではないでしょう。では2問目です。好きなキャラクターはなんですか？」

秀人「なんか…酷くない？えーと好きなキャラクターは「エルシャダイ」のイーノックかな。」

星也「ここはまだまともでした。では最後の質問です。神龍にお願いごと1つだけです。なにをお願いします？」

秀人「そ、そりゃあやつぱり「ギャルのパンt

星也「それでは時間です。またお会いしましょう。」

秀人「つておい！まだ言つてねえよ！」

第9話　途中経過（前書き）

序盤秀人の暴走注意報。それではどうぞ！10話から『星也の人間観察コーナー』と並行して『NGコーナー』をさせてもらいます。

第9話　途中経過

保健室へと戻つてきた星也達。他のグループはすでに戻つていていた。

ジャイアン「ではこれから各グループずつ途中経過を報告してもらう。俺の班はコンビニに行つて食えそうなものを持ってきた。この後も何回かに分けて取りに行くつもりだ。」

ジャイアンは自分達の途中経過を言つた。ここで出木杉が出木杉「机の上にあるものは食べれそうなものではないのですけど…」

出木杉は食べ物でない机の上のものに注目をした。

星也「むしろあれが食べ物に見えたなら秀人みたいな変人です。」

星也は例えをまじえ出木杉に言つ。

秀人「おい、星也！それはどういふことだ！？」

秀人は星也の例えが気に入らなかつたようで怒り氣味で星也に言つ。

星也「それでは続きお願ひします。」

しかし、星也はそれをおかまいなしに続きを言つよひジャイアンを促す。

秀人「スルー！？おい、星也！スルーか？」

ジャイアン「それは近くにあつた店から取つてきたものです。」

先ほどの出木杉の質問にジャイアンは答える。

秀人「それほど武器があるとは…もしかしてパン屋さんか？」

スネ夫「いえ、猟銃を扱つている店でした。」

のび太「そんなパン屋さん怖いよ。」

星也「全くです。どういつ思考回路でパン屋さんにありついたのですか？」

秀人の問題発言にスネ夫はかるく答える。そして、のび太と星也がツッコミを入れる。

秀人「わりいわりい冗談だ。じゃあ次はわたし達かな。」

秀人がそう言つと美琴が報告を始める。

美琴「私達は病院に行つて傷薬や包帯などを持つてきました。私達ももう一回は取りに行きます。」

美琴は淡々と自分たちの成果を言つた。

秀人「咲夜さん、流石な俺に惚れるやろ？」

星也「すみません、ちょっとすみません。」

秀人が咲夜にアホなことを言つた後に星也は秀人の服の襟を持つて廊下に出た。

ボグツ

「ぎゃう

星也達が廊下に出た後に何かを殴つた音と秀人の声が聞こえた。美琴は苦笑いをしていた。

星也「次の班よろしくお願ひします。」

星也がそう言つと出木杉は

出木杉「そついいえば静香さん達見かけなかつたんですがどこにいたんですか？」

出木杉がそう聞くと

静香「私達は園芸部のところに行つてハーブを取つてきたわ。」

咲夜「そこにあるものは調合済みだから持つていつていわ。」

静香がそう言つと咲夜は保健室の端に指をさす。確かにそこには調合済みのハーブがあつた。

白峰「次は俺達かな。」

出木杉「僕達は学校を探索していたのですがハンドガンの弾や体育館の鍵しか見つけれなかつた。体育館でのび太君達に助けてもらいました。」

出木杉が残念そうに言つた。

ジャイアン「へえ～、のび太にか。」

スネ夫「やるよくなつたじやないか。」

ジャイアンとスネ夫は少し小馬鹿にして言つた。

星也「のび太君はすごいですよ。ハンドガン一発でゾンビを倒したんですよ。」

のび太「星也さんこそハンドガン一回も使ってないじゃないですか。」

星也「僕にはチャクラムがあれば十分です。」

星也とのび太は誉め合つた。のび太の言葉を聞いて星也はこれだけでいいと言つてチャクラムを出す。

秀人「毎回思うけどその武器は一体何なんだ?どこで手に入れた?」

星也「これですか?今は亡き親友からもらつたものです。」

秀人「なんか……すまんな。」

秀人がした質問に対し星也が言つた答えに一同気まずくなつた。

星也「そうだ!みんなに言つておかなければならぬことがあります。」

のび太「そうだ!はる夫が……死んだ。」

星也、のび太除く一同「…………」

星也の言葉に思い出したようにのび太が言った。はる夫を知つていた人は驚き、悲しんだ。

星也「しかし、はる夫君は「体育館にはきをつけろ」みたいなことを言つていたので僕らは体育館に行つてみました。そしたら、出木杉君達と合流したわけです。」

星也がはる夫の言つていたことを話した。

のび太「それで体育館には巨大な化け物がいたんだよ…………」

星也、のび太、出木杉、白峰除く一同「…………」
のび太の言葉に一同は驚きを隠せなかつた。

ジャイアン「それは本当か?」

白峰「ああ、本当だ。保証する。」

星也「カメレオンみたいな生物で周りと同化できる能力を持ついました。」

咲夜「それは厄介ね。」

ジャイアンの質問に白峰と星也が答えた。咲夜は厄介だと言つていた。

ジャイアン「静香ちゃん達はそういうの見たか?」

静香「いいえ、見てないわ。」

ジャイアン「じゃあ、そいつは注意しろよ。」

ジャイアンは静香に質問してそう言つた。

のび太「しばらく大丈夫だと思いますよ。星也さんが蹴り飛ばしましたから。」

のび太、星也、出木杉、白峰除く一同

「ハア！？」

のび太の言葉にまたしても一同驚く。

スネ夫「星也さん、人間ですか？」

星也「…………。」

スネ夫が聞いたことに星也は無言だった。そして、黙つて保健室を出てつてしまつた。

秀人「スネ夫、お前あいつに1番言つたら駄目なこと言つたな。」

スネ夫「え？」

美琴「彼は中1の頃に私達の街に来たの。そして、彼は中1の時から1人暮らしだったわ。もとのいた街は破壊されたって言つてたわ。その街では人として認められずに悪魔として認められていたらしいのよ。」

美琴の話した内容を聞いて一同沈黙が続いた。それを破つたのは秀人だつた。

秀人「まあ、あいつは優しいいい奴だから気にすることはない。ただ、そういうことはあいつのトラウマをよみがえさせるから、しないほうがいいって話だ。」

秀人は先ほどの美琴の発言をフォローするように言った。

秀人「しばらくあいつは来ないとと思うからせつと探索再開せようぜ。」

ジャイアン「じゃあ、みんな散開！」

少しつけて一同は散開した。トイレで星也が倒れてることを知らずに。

第9話　途中経過（後書き）

星也「今回もやつてまいりました。人間観察コーナーの時間です。今日のゲストは姫野美琴さんです。」

美琴「みなさんこんにちは。」

星也「では早速1問目です。姫野家はかつてシャーマンだったと聞きますが本当ですか？」

美琴「はい。本当です。主に除霊をしていましたようです。」

星也「なるほど。それでは2問目です。何か呪還できると聞きますが本当ですか？」

美琴「できるよ。出てきて、コン！」

ほんっ

星也「これは…狐ですか？かわいいですね。」

美琴「この子は【九火】と言われる怪異の一つ。勝手に尻尾に触れる9日後に火で死ぬと言われてるわ。」

星也「なかなか興味深いですね。美琴さんが尻尾に触れたときはどうなるのですか？」

「ン」「我的尻尾は認めた者しか触れぬ。」

星也「しゃべれたの？それはおいで最後の質問です。好きな人はいますか？」

美琴「え…？す、好きな人？／／／」

星也「あの、顔が真っ赤ですが誰ですか？」

コン「仕方がない。我が話そう。美琴の好きな人はおな

美琴「ちょっとコン！勝手に言わないで！じ、じゃあね。星也君／＼。」

星也「……美琴さんには誰だか知りませんが好きな人がいるようです。インタビューする人が行つてしまつたのでこれで終わります。またお会いしましょう。」

第10話 覚醒（前書き）

少し分かりにくいです。書き方変えました。前のとじかわがよいか意見ください。

第10話 覚醒

Side 星也

僕は少し昔のことを思い出してしまったので、気分を変えるため少し歩いていました。しかし、トイレの前にさしかかったところで頭痛が襲ってきました。

「ぐ……あ……あ。」

な……なんだこの痛みは？あ、頭がかち割れるくらいに痛い。僕はトイレに入り頭を冷やそうとしたが、入ったところで意識を失ってしまいました。

僕が田を覚ますと辺りが真っ黒な空間に立っていました。

「…………どうですか？」

？「やつと田が覚めたか。」

いきなり誰かが僕に話しかけてきました。振り向くと……

「ほ、僕？」

自分みたいな人が立っていました。

？「そうだ。俺はお前だ。」

「意味が分からないです。世界で僕は一人だけの筈です。」

？「ああ、その通りだ。でも、ここのがお前のいる世界と思うつか？」

何を言つてゐるんです？」の人は？

？「はあ…。全く解つていらない様子だな。少しきらこは教えてやるか。俺はお前の心の闇だ。自分と区別つけたけりや「黒也」とでも呼べ。

「なるほど。では、黒也さん。ここの僕の中なんですね。」

黒也「お～お、流石。察しが早い」と。

「では、続けて問います。何をしにきたのですか？」

黒也「何をしにきたか？昔の約束を果たしてきましたんだよ。」

「？」

「まあ、説明よりやつたほうが早い。いくぞ。」

すると彼は白い球状をこちらに投げてきた。僕は避けようとしたが、

体が動かなかつた。当然、白い球状のものをぐりつてしましました。
「あれ？痛くありません。どうして…！」

「うあ……い……痛い。」

また、あの痛みだ。頭がかち割れてしまつ…。

S.i.d e秀人

言葉で言つてもやはり心配になつた。星也を探して三千里…なんてな。つてふざけてる場合じやねー。星也、どこにいったんだよ。トイレを開けてみた。すると星也が倒れていた。

「星也…-----」

おい、どうした？起きろよ。おい。どれだけゆすっても星やは起きなかつた。わたしは急いで保健室に運んだ。みんなにはあまり心配をかけさせないため連絡はしなかつた。

S.i.d e星也

かち割れるくらいの痛みと共に何かが流れ込んできた。これはもしかして…

「昔の……記憶？」

黒也「そうだ。昔の記憶だ。お前は自分の正体を知つていたらあの

力を使つて争いを起こすかもしれない恐怖と自分の正体をくらますために俺と契約をした。お前があの力を預けるかわりに6歳までの記憶を俺に差し出した。そして、俺にこう頼んだ。「この力はいつが必要となる日がくる。そのときに記憶と共にこの力をもらいたい」と。そして、そのときがきた。だから昔の記憶と共にお前の悪魔の力を返そう。」

「ああ、なるほど。そういうことか……懐かしい。よく幼稚園でケンカしたり、物壊していたりしていました。あ、じいちゃんだ。綺麗な土下座です。じいちゃんから聞いた言葉がいくつも蘇ってきます。僕はじいちゃんに憧れていたんだなあ。そんな記憶を思い出していました。

黒也「これがお前の記憶の全てだ。悪魔の力も使えるはずだ。やってみる。」

「悪魔の力? こうでしようか? おお、力をためてみたらにか黒いオーラが出ました。

黒也「それが悪魔の力だ。完全な悪魔の力を得るためにには魔刀『阿修羅』が必要だ。」

「まだ完全ではないんですか?」

黒也「お前は悪魔の力を半分にし俺と魔刀にそれぞれ預けた。だから、お前の力はまだ半分しか戻っていない。魔刀はどこにあるか知らないぜ。」

魔刀『阿修羅』……あー思い出しました。

「多分魔刀は僕のいた世界にあります。」

黒也「…どうすんだ？お前？」

で、ですよねー。まあ、それはまた考えるとします…。あ、そつ
いえば

「僕の悪魔の力には個人としてどんな能力があるんですか？」

黒也「ほう、それも記憶にあったか。」

「はい。しかし、昔の僕はその能力を使っていないようなので是非
教えてもらいたいのですが…」

黒也「仕方がねーな。特別に教えてやるよ。お前の悪魔の力は…

といつものだ。分かつたか？」

「分かりました。」

そ、そんな能力があるとは少し予想外です。

黒也「そろそろ戻ったほうがいいんじゃね？みんな心配しているだ
うつよ。」

「いや、自意識で戻れるものなんですか？」

黒也「いいじで皿をつぶつて「戻れ」と願うと戻れる。」

あ、そんなのでいいんですか？なんと簡単な。

「それでは戻りますが一つ質問が…」

黒也「なんだ？」

「なんで僕の約束を守ったのですか？そのままにしておけば僕を乗つ取れたのじゃないか？」

黒也「なかなかに鋭いな。やつぱり。お前と同じ律儀なんだよ。約束は守る主義だ。」

「ナリかありがとうござります。」

黒也「あと、いいとは意識して皿をつぶれば来ることができるからな。」

「分かりました。」

黒也「闇の力なら一つでも…

「本当にありがとうございました。また今度お会いしましょ。」

僕はそつまつて皿をつむった。気がつくとビックのベッドに横たわっていた。

S.i.d.e 美琴

星也君… お願い。早く田を覚ましてよ。ずっとそう願った。

秀人「星也が田を覚ましたぞ。」

！…！…星也君…

S.i.d.e 星也

秀人「星也が田を覚ましたぞ。」

起きると秀人がそう言つてゐるのが聞こえました。辺りを見るとこれは保健室のようです。確認をすると誰かが僕に抱きついてきた。

「美琴さん？」

美琴「よかつた。よかつたよ。私、ずっと心配していたのよ。星也君、田が覚めてよかつた。」

秀人さんは優しいですね。寝ていた僕をずっと心配していくてくれて。

秀人「姫野に感謝しろよ。ずっと看病していくてくれたんだぞ。」

ずっと看病していたのですか？美琴さんに頭があがりません。

「美琴さん、ずっと看病してくれましてありがとうございます。僕

はもう大丈夫です。」

僕は笑顔で美琴さんに言つた。なぜか美琴さんの顔が赤くなつていました。

秀人「なんで倒れてたんだ?」

「いや、いきなり頭痛がしたもので。頭がかち割れるくらい痛かつたです。」

秀人「大丈夫か?探索できる?」

「できます。」

美琴「星也君……無茶…しないでね。」

「分かりました。美琴さん。」

秀人「のび太と出木杉、白峰はもう2階の探索に行つたぞ。」

「秀人、ありがとうございます。」

美琴「本当に大丈夫なの?」

「大丈夫です。じいちゃんみたいに体は強いほうです。」

秀人「お前がわたし達に家族の話したの初めてじゃね?」

「え、そうでしたっけ?まあ、いいです。では行きます。」

そうして僕は2階に走っていった。

第10話 覚醒（後書き）

NG集 その1

バイオゲテスより

星也「な……なんてでかさー!? みんなん、早く逃げましょー!」

ノミコロトハシ

ダダダダダダダダ

グギヤアアアア

星也「の、のび太君が壊れました。出木杉君、のび太君をなん……と
か？で、出木杉君？君もどこからアサルトライフルを？」

出木杉「絶好のチャンスだあ！」

ズダダダダダダダダダダダダ

星也「白峰く……ん？」

白峰「今から貴様に生き地獄を味わわせてやる。」

星也「白峰君！待て！ナイフ持つて突撃しないでください！」

そして5分後：バイオグラスは体育館で死んでしまった。

第1-1話 探索【2階】（前書き）

今回のあとがきはオマケです。もう1人のオリキャラの話です。

第11話 探索【2階】

S.i.d.e星也

悪魔の力が半分戻った僕は2階へと登っていました。

「 のび太君…どこですか~?」

2階につくとのび太君を探しました。しかし、出てきたのは、ゾンビ達でした。

「ゾンビさんはお還りください。」

そう言つてチャクラムを利用して、ゾンビ達の首を切斷しました。かなりグロいです。

「のび太君。

ガタンッ

!—!?

僕が叫ぼうとしたら、いきなり廊下の天井の板が外れた。

(もしかして… のび太君かな?)

ねえから。絶対。B Y作者

僕は警戒してそこを見る。すると、そこから人とノミみたいな虫を抱き合わせたような生物が出てきた。

「 なんですか？これ… のび太君かと思いました。」

絶対ねえから！B Y作者

その生物は降りてきていきなり飛びかかってきました。

「 遅すぎます。」

僕は生物の飛びかかりをひょいとかわしました。そして、生物の後ろにまわり、

「 わよひなひ。」

僕はつすらと笑いながら生物の背中を蹴ると生物は壁にめりこみました。念のため、チャクラムでどごめををしておきました。

「 ふう…。」

僕は一息つくと

白峰「星也さん？」

「 ああ、白峰君。」

白峰君と会いました。あれ？出木杉君は？

「 白峰君、出木杉君は？」

白峰「今は別行動をしています。」

「分かりました。あと一つ聞きたいことが…

バンッ バンッ

!!!!!!」

僕が白峰君に質問しようとしたら、近くで銃声が聞こえました。

星也「今、近くで銃声が…」

白峰「星也さん、あれこの部屋です。」

白峰君は「図書室」と書かれていた部屋を指さしていました。すぐ僕らは図書室へと向きました。

白峰「おこー誰かいるのか?」

のび太「その声は白峰さん?」

「のび太君!~ど~したのですか?」

のび太「星也さんも。この扉が開かないんです。」

白峰「じゃあ、コイツで。」

星也「待ってください。」これは僕に任せてください。のび太君。扉からかなり離れてください。」

僕はのび太君にそう言つと扉を思いつきり蹴りました。扉は向いつの壁まで吹つ飛んでいったようです。

星也「あれ?やつすきました。」

のび太君と白峰君が呆然としています。やはり、少し扱いが難しいですね。…ハツ！

星也「のび太君。後ろ。」

のび太「えつ？」

僕の言葉を聞いてのび太君は後ろを向いた。

カアー カアー

のび太君の後ろからゾンビ化したカラスがきました。

のび太「うわあああ…ビ…ドラえもん！」

やつぱりドラえもんもいるのか。会つたらサイン貰いましょう。…
つてそれどころではありませんでした。

星也「白峰君。のび太君を頼みます。僕はカラスをなんとかします。

」

僕は白峰君にそう言ってカラスに向かつていった。

Side 白峰

星也さんは俺に「のび太を頼む」と言って走つていった。じゃあ、野田を助けるか。

「いっただー野田！」

のび太「野田じゃありません！野比です！」

あれ？名前間違えたか。まあ、いいか。

のび太「白峰さん。ありがとうございます。」

無事に図書室から出ると野比は礼を言つてきた。

「いや、お礼なら星也さんに言え。星也さんが指示したからよ。」

まあ、実際そ^うだしな。そ^ういえば、星也さん大丈夫だらうか。
…大丈夫だろ。

のび太「ハツ！白峰さん、僕は用があるので行きます。」

なんだ？なんかあるのか？

「俺は星也さんを助けたら、また1階見てくる。」

そう言つと野比は走つていつた。その後俺は図書室へ入つた。俺の予想通りカラスは星也さんによつて全滅していた。

Side 星也

弱すぎます。束になつてもはなしになりませんでした。そつ考えて
いると白峰君が入つてきた。

白峰「あれ? カラスは?」

「全滅させました。のび太君はいませんがどこへ行きましたか?」

僕はのび太君のことを白峰君に聞きました。

白峰「なんか用事を思つ出したよつて走つてどこかに行きました。
でも、まだ2階にいると思います。」

なるほど。早くのび太君においつかなくては。

「ありがとうございます。では、また。」

白峰「星せわん、一つ質問いいですか?」

僕は走りつとしたら白峰が質問をしてきました。

「なんですか?」

白峰「……星せわんは一体なんなんですか?」

「なかなか鋭いですね。僕には何かがあると考えているのですか。
まあ、常識から外れているんじゃないといふを見ていますしね……。

「…………その話はまた後にしてもらわせんか?今は急いでいる
ので。」

白峰「……分かりました。また今度話してもらいます。」

僕はあいまいな返答でなんとかやり過ぎした。しかし、みなさん僕

が悪魔だと知つたらどんな反応するでしょう。やつぱりみなさんも僕を拒絶するのでしょうか。少なくとも秀人や美琴さん、それに彼とは友達としていられないような気がします。僕はそんな不安を抱えながらのび太君を探しました。しばらく探すとのび太君は女子更衣室の前で発見しました。

「のび太君。一体何をしているのですか？」

のび太「えーと…中に誰かいるのですが中から鍵がかかって入れないんです。」

「のび太君。少しどいていてください。」

ドカッ

僕は鍵がかかっている更衣室の扉を蹴り壊した。

「 行きますよ。」

のび太「…………はい。」

やつぱり少しひきましたね。当然ですか。

のび太「あれ? 何もいません。僕の勘違いでしょうか…」

ガタンッ

「いや、ロッカーの中になにかいいます。一つずつ調べていきましょう。」

僕らはロッカーを一つ一つ調べました。他の人からみたらただの変態です。調べていくと一つだけ鍵がかかっているロッカーがありました。

「うーーですね。のび太君、なにか武器を持つていませんか?」

のび太「一応トンファーを持っていますが僕がやります。星也さんだったら、少し危ないです。」

「じゃあお願ひします。」

僕があ願いするとのび太君はロッカーをトンファーでたたきはじめた。本当に変態に見えます。そんな事を考えているとロッカーの鍵を壊していくつでも開けられる状態になつたみたいです。

のび太「星也さん、1・2・3で開けますよ。」

「分かりました。」

僕が返事をするとカウントを始める。

のび太「1・2・」

のび太君が3と言おうとしたときでした。

バンッ

?「いやああああー」ないでええええー

のび太「うげえつ!」

のび太君を吹っ飛ばして出てきたのは学校の制服を着た頭に黄色いカチューシャをつけた子だった。

出木杉「なんですか!?.今の音は!?.あ.....聖奈さん?」

聖奈「で、出木杉君？」

出木杉「無事だつたんですね。」

聖奈「私は大丈夫だけど…その子が…」

星也「のび太君！大丈夫！」

出木杉「のび太君！大丈夫！？」

のび太「う……出木杉君……僕はもうダメだ……ビ、ドラえもんにミ
ーちゃんと仲良く…………ガクツ」

星也「のび太君————！」

僕らはジャイアン君に連絡し、一回集まることとなり、保健室に戻ることにした。僕はのび太君を抱いで。

（保健室）

ジャイアン「聖奈さん！聖奈さんじゃないか！」

スネ夫「良かつた。生きていたんだ。」

聖奈「私、みなさんと会つまでもう本当にダメかと…。」

星也「でも、諦めなかつたからこゝして希望が見えましたね。」

秀人「そうーわたしといつ名の希望…げふつー」

またこの人は…。せつかく感動的な空氣なんですから少し黙つていてください。え?なにしたか?もちろん肘うちです。秀人の腹にです。

ジャイアン「聖奈さんがいれば心強いです。」

スネ夫「心強い根拠が分からぬいけどよろしく。」

聖奈「はい!非力ながらも頑張らせてもらいます。」

聖奈さんがそう言った。なかなかしつかりとした子ですね。ファンクラブとかありますね。

静香「それでのび太さんはなんで寝てるの?」

星也「さつきロッカーに当たつたときに頭をうつたようですね。」

美琴「外傷はないので大丈夫だと思います。」

僕と美琴さんはみなさんに説明しました。

聖奈「…、…めんなさい。私のせい…」

ジャイアン「聖奈さんはなにも悪くないよ。悪いのはボケーッとしていたのび太！」

スネ夫「そう！ のび太が悪いんだ。」

出木杉（果たして本当にそうなのか？）

聖奈さんは謝るがジャイアン君とスネ夫君はのび太が悪いと主張していました。本当にそのなのでしょうか。あれ？

「そういえば、白峰君は？」

咲夜「本当だわ。さつきまでいたのに…」

みなさん白峰君を心配しているようですね。もしかして…。

ジャイアン「それじゃあ今いる人で話し合いするぞ。」

（話し合い後）

のび太「あれ？ こには？」

「保健室です。あと机の上に聖奈さんから手紙があります。」

僕がそう言つとのび太君は手紙を読み始めた。

（のび太手紙黙読中）

のび太「なるほど…。これは、手紙に書いてあつた3階の防火シャッターの鍵かな。」

「そのようですね。では、行きましょう。」

僕らは管理室へ行つて3階の防火シャッターの鍵をまわしました。すると、3階の防火シャッターが開いたようです。そして、3階に行きました。

第11話 探索【2階】（後書き）

オマケ

な、なんだ？ここは？確かに試合の帰りに白い空間に包まれて……ん？何だ？大勢の人が歩いてきたぞ。いや、あれは、ゾンビだ……。目障りな。

「邪魔だ！どけえ！」

そう言って竜神流拳法を使い、ゾンビ共をぶつ倒していく。星也…どこにいる？

オリキャラ紹介～1～（前書き）

今回は秀人、美琴のプロフィールです。

オリキャラ紹介～1～

中村 ひでと
なかむら ひでと

身長 188 cm

体重 68 kg

年齢 16 歳

性別 男

性格 さびしがり屋

・ 穏やか

・ ナルシスト

・ のんびり屋

誕生日 5月17日

好きなもの

・ ハンバーーガー

・ コーラ

・ フライドポテト

・ ニコニコ動画

嫌いなもの

・ 蜂

・ 鳥賊

・ 高一病

外見 スケット・ダンスにてぐる笛吹和義のメガネを外したような感じ

星也の親友。かなりのイケメンであるも高二病を忌み嫌う中二病。さらに二コ厨といういう痛い設定も持つてはいる別名「残念すぎるイケメン」。そして、ナンパの常習犯。しかしげざとなると頼りになる心強い人。銃火器は全て扱え基本的には銃を使って戦う。あと、設計図があれば銃火器の改造、オリジナル銃火器を作ることができる。ある事件により父親を失っている。

能力

秀人自身持っているがネタバレとなるため表記不可。

姫野
ひめの
美琴
みこと

身長
163cm
体重
43kg

年齢 15歳

性別 女

性格 優しい

明るい

礼儀正しい

天然

誕生日 10月7日

好きなもの

あつさりしたもの

ロールケーキ

林檎

才川星也（love）

嫌いなもの

脂っこいもの

味のしつこいもの

人を簡単に殺す人

外見 怪異症候群の姫野美琴そのまま

もともとはキャラをひっぱつてくるだけだったのに完全にオリキャラとなつた。いろいろあつて1人になつたところを星也に拾われる。一緒に住んでいたことで星也に恋心ができる。誰よりも人の大切さを知っている。シャーマンの家系で祓魔中心の呪術を身につけている。医療についても詳しい。

能力

- ・ 妖狐「九火」の召還
- ・ 袴魔の札を扱える
- ・ 怪異を感じ取る力
- ・ 怪異の力を弱くする力

オリキャラ紹介～1～（後書き）

今日はあとがき「コーナーは休みです。すみません。

第1-2話 探索【3階】（前書き）

今回はかなり多めにカットを入れました。すみません。

第1-2話 探索【3階】

S.i.d.e 星也

僕たちは3階の防火シャッターの鍵で防火シャッターを開きました。
そして、3階に行こうとしたときでした。

ピリリリリリ…

突然誰かのケー・タイが鳴りました。僕のではありません。では、

のび太「もしもし。」

やはりのび太君でした。何か話していますね。誰からでしょうか。
少し待つとしましょう。

のび太「しづかちゃん！？もしもし！？」

「のび太君！？どうかしたのですか？」

のび太「今しづかちゃんから電話がきまして裏口のロックを解除する書類を見つけたらしいのですが…ゾンビに追いかけられていたみたいで…」

「それで電話がいきなり切れたんですね。」

のび太「はい。」

あちらはかなり大変なようですね。無事だといいですけど…。あ！
そうだ！電話をかけて場所を教えてもらえば…いや、今は駄目です。
ゾンビに追いかけられているようなのでまたあとにでもかけましょ

う。

「やつですか。では僕たちは探索を再開させまじょ。」

のび太「え？でも…」

「助けに行きたいのは分かりますが場所も分からないのでどうしようもありません。だから、僕たちは今出来ることをやりましょ。」

のび太「そうですね。では3階に行きましょう。」

僕はそう言ったもののやはり不安が残ります。しかし、ずっと心配していくても何も起こらないので目の前のことに集中しょ。そして、僕たちは3階に走つていった。

というわけで理科室とその横の部屋以外の探索が終わりました。
え？なんでとばしたか…ですか。3階は1階みたいに探索していつただけですし、敵も弱すぎて話になりません。しかも、広いわりに必要そうなものが何かの小さい鍵、パスコードB、ハンドガンの弾、ショットガンの弾くらいしか見つからなかつたのです。だからとばさせてもらいました。

「理科室ですか…。ここも僕が…」

のび太「星也さん。隣の部屋開いていますよ。」

「そうですか。ではそこから入つていきましょ。無理矢理蹴り飛ばす」こともないですから。」

さて、隣の部屋は… 理科準備室ですか。必ず学校にありますよね。理科準備室。僕の通つてる高校にもありました。僕が理科準備室の扉を開けました。すると中には血だらけの少年と青い狸がいた。

のび太「ど、ドラえもん! それに安雄も!」

「ど、ドラえもん! ? あの国民的アイドルのドラえもん! ? え? 本当に? 真面目に本物ならサインもらいたい。」

ドラえもん「のび太君! … そちらのかたは?」

「僕ですか。僕は才川星也と申します。星也と呼んでも構わんたら光栄です。」

お互いの自己紹介をして、握手した。や、やっぱ。ドラえもんさんと握手した。あとで秀人に自慢しました。

のび太「や、安雄! どうしたんだ! ? その傷は?」

安雄「の、のび太か。この学校はマジでやばい。早く街から出るんだ… とんでもない化け物がいるぜ。」

ドラえもん「喋つちや駄目だよ。じつとしているんだ。」

「この傷は……」

この傷… はる夫君の肩の傷と同じです。もしかして…

「安雄君！…その傷は誰にやられたものですか？」

安雄「あれは…地球上の生き物じゃねえ…お化け嫌いな僕にはゾンビはちびる程怖かったがもう慣れちまつた…でもあの化け物を見たときは腰が抜けたよ。まるでカメレオンみたいな奴だったよ。」

「やはり、はる夫君と同じ化け物ですね。おまけに安雄君は体に毒が入つてこるようですね。」

ドラえもん「そなんですよ。だから、血清が必要なんですが…」

「分かりました。僕が取りに行きます。のび太君はここで待っていてください。」

自分で言つのもどうかとは思いますが足が速い僕が逝くべき…あ、間違えました。行くべきでしょう。

のび太「でも、血清がどこにあるか分かるのですか？」

「おそれらへ保健室にあると思うので少し行つてきます。」

僕はそう言つて保健室を出た。しかし…

「カメレオンの血清つて日本にあるのか？確かに外国には毒のある力メレオンの血清とかあるみたいですが…」

まあ、とうあえず行つてみてから考えます。といひが、

アーアー…

ゾンビさんたちの熱烈な部活勧誘が…。え？ゾンビさんたちは何部か？ゾンビ部だと思います。面倒なのでスルーします。そして保健

室につきました。ほぼ理科室の下みたいな感じですね。ええと 血清は…あの戸棚のようですね。か、鍵がかかってる…?…どうしましょ?…あーそういえばさつき小さな鍵を拾いましたがこの鍵でしうか。あ、開きました。ええと血清は…これですね。あれ?金田さんは?まあ、今はいいです。早く行きましょう。僕は走って理科準備室に行つた。

「ドラえもんさん。血清です。」

そう言つてドラえもんさんに渡した。

ドラえもん「安雄君。血清うつかりもつ大丈夫だよ。」

ドラえもんさんは安雄君に血清をうつた。果たしてあの手で注射器を持てるのでしょうか。何はともあれ安雄君の命は救われました。

安雄「星せさんありがとうござります。それとのび太…僕はお前を見直したよ。普段はダメダメで弱虫な癖にゾンビたち相手にあんなに…勇敢に…戦う…な…んて…」

のび太「安雄!…おー…どうしたんだ?」

ドラえもん「大丈夫。氣を失つただけだよ。命に別状はないはず。」

「よ、よかつた。」

ドラえもん「近くに相談室あつたよね。そじで休ませよ?。」

のび太「いや、待つてくれ。保健室に運ぼう。今からみんな呼ぶね。」

待つて。確か廊下にはさつきスルーしたゾンビ部のみなさんが…。
ここは責任持つて僕が倒そう。

「では僕は廊下にいるゾンビを迎撃してきます。」

僕は廊下に出てゾンビを倒していました。そして保健室につきました。

Side秀人

わたしだ。秀人だ。わたしたちは今ゾンバラ（ゾンビバラダイス）で今ゾンビと戯れているところだ。

美琴「一人でブツブツ言つてないで手伝つて下さい。」

姫野に怒られた。まあ単にゾンビの群れと交戦中です。…つておわ
あ後ろからゾンビがあ！

美琴「中村君！」

ああ、オワタオレ。My life finish・しかし…
バンッ

ショットガン特有の銃声が鳴り響いた。気がつくとわたしを襲おう
としていたゾンビの首は吹っ飛んでいた。

?「久しぶりだな。姫野に秀人。」

声のした方向を振り向くとわたしたちだけなく星も知っている
あの男が立っていた。

第1-2話 探索【3階】（後書き）

ZG集その2

～保健室の戸棚にて～

星也「この鍵でしおつか？おひつと試してみましょ。」

ガチャッ

星也「開きました。では血清を…ん？なんですかこの箱？」

ピンポーン…《血清を利用するにはHDCカードを差し込んで下さい。》

「……那儿にあるんですか？」

～3分後～

「戸棚の中に偶然入っていまして助かりました。」

ピンポーン…《HDCカードの認識まで30分～1時間かかります。》

「安雄君死んでしまいますよ。」

～30分後～

「まだ間に合っちゃうです。しかし、急ぎましょ。」

ピンポーン…《ホールドエンブレムをはじめてください。》

「ふやけるなああああああ…」

そのとき

のび太「安雄おおおおおお…」

「あう……やめやめた。

最後キヤリ崩壊が…てこつかやけめつたじやない。

第13話 準主人公Side（前書き）

今回はもう一人のオリキャラ視点です。主人公が空氣です。

第13話 準主人公Side

Side 龍輝

よお。俺の名前は高岸龍輝。ただの高1だ。しかし、突然白い空間に包まれ気がつくとゾンビだらけの街に飛ばされていた。まあ、ゾンビと言つても肉体は腐っているから素手でも倒すことができる。でも、もしものためにショットガンを2丁持つていて。ゾンビが多い面倒な所では右手、左手にそれぞれショットガン1丁ずつ持つて打つていて。そんな終わりの見えない動作をしてると俺の親友である秀人と顔見知りの姫野が見えた。秀人がゾンビに襲われそうだったので右手のショットガンで秀人を襲おうとしたゾンビを打った。それで今に至る。

秀人「なつ…龍輝！ なんでここに？」

「俺がいたら悪いか？」

「なんでここに？ つてどういうことだ？」

美琴「高岸君。どういう経路でここに？」

龍輝「あ？ なんか白い空間に包まれて…。」

秀人「お前もか…。」

「あ？ どういうことだ？」

「おい待て！ 話が見えないとぞ。」

秀人「……わたしが説明しよう。」

そして、秀人はいろいろ話してくれた。世界についてのこと、アビリティーについてのことなど。その話は非現実的だったがこの状況だから納得できた。でも、その話を聞いて疑問に思ったことがあった。

「待てよ。誰かについて誰にだ？」

美琴「分からぬんです。でも、私たちはそう仮定しているんです。」

「確かにそう仮定する以外ないな。でも、俺は……」

「俺はひとつ心当たりがあるんだが……」

秀人「！？だ、誰だよ！一体？」

「……言つてもいいが、一つだけ約束がある。」

美琴「なんですか？」

「星也にはこれからする話は言つな。」

もし、あいつがこの話……といつも通り仮定を聞くと傷つくかもしれないからだ。

秀人「なぜ星也に？……まあいい。で、それで誰だ？」

「……才川家だ。」

秀人・美琴「…………？」

そりやあ驚くわな。だってあいつの家の人たちだもんな。

美琴「ちょ、ちょっと待つて。じゃあ星也君がこの状況を…」

「いや、違う。あいつはこの状況を生み出したことになんの関連もない。ただ、あいつは俺らには家族のことを話そうとしなかった。たぶんあいつは才川家に何かしら嫌な思い出があるのだろう。」

秀人「いや、さつき少しだけじいちゃんのことを話していたが…」

「じいちゃん?いや、ありえんな。俺は才川家について調べたんだが才川家の祖父は20年前に死んでいる。」

秀人・美琴「…………？」

「他にまだ分かつたことがある。才川家のあつた街が4年前に跡形もなく消されている。この街が消されたのは9月9日。そして星也が俺たちの街に来たのが9月10日だ。妙につじつまがあうんだよ。」

「

美琴「あの地下工場爆発事故ですか。ニュースになっていましたね。」

「

秀人「地下工場が爆発しただけなのにその街の住民全員が亡くなつたと言われているあの不自然な事故か。一時二ヵ動の中二病共が」

「そうだ。その後才川家は事故の責任をとられ、死んでいふところだ。」

美琴「でも、星也君が日本に残つていた。」

「そう。もし才川家が生きていたとしたら星也は邪魔な存在のはずだ。」

美琴「なんですか？」

「才川家は裏で政治を牛耳つているような一家だぞ。そんな簡単に死んだとも思へん。才川家が何かを隠し研究をしているならば世間に死んだと思われたほうが動きやすい。だから星也が生きていたら才川家はまだ生きていると思われるんだ。」

秀人「つまり、大雑把に言うと才川家の研究をしているものがこの状況を作り出したと言いたいのか？」

「そういうことだ。こんなゾンビを作り出せるオーバーテクノロジーを持つている人は限られているからな。」

秀人「なるほどな。」

しかし、この仮定は信憑性がないんだよな。

美琴「でも、それなら星也君は何者なの？星也君の言つていたじいちゃんつて誰なの？」

秀人「あいつは昔から謎だらけだよな。」

「…………星也はどうしている？」

1回あいつと話したい。なんとしても。

秀人「あいつなら近くの小学校にいる。」

「わりい。そこまで案内してくれ。あいつに会いたい。」

秀人「…………同性愛者？」

「…………お前1回あの世を見る必要があるな。」

美琴「中村君。冗談言つてないで行くわよ。」

そして、生存者が集まっている小学校へと到着した。

第13話 準主人公Side（後書き）

星也「皆さんにちは。星也の人間観察コーナーです。今日のゲストは高岸龍輝です。」

龍輝「よろしく。」

星也「では一つ目の質問です。趣味はなんですか？」

龍輝「ゲームだな。」

星也「あれ？バスケは…」

龍輝「バスケは俺の専売特許。」

星也「…………。では二つ目の質問です。竜神拳法ってなんですか？」

龍輝「竜神拳法は高岸家に代々伝わっている拳法だ。主に「氣」という波動を使う。」

星也「なるほど。それでは最後の質問です。好きなゲームはなんですか？」

龍輝「『龍が如く』や『ファイナルファンタジー』『星也』『ファイナルファンタジー』！僕も好きです。ちょっと語り合いましょう。それではこれで終了です。またお会いしましょう。ええと…好きなキャラクターですか……」

第1-4話 救出（前書き）

今日はあとがわ「一ノ一」ありません。すみません。

第14話 救出

S·i·d e星也

僕たちは保健室に戻ると安雄君を寝かせました。すると出木杉君が入ってきました。

出木杉「ドラえもん！無事だつたんだね。」

「ドラえもん！」出木杉君は無事で何よりだよ。」

出木杉君とドラえもんさんはどうやら認識があるみたいでお互いの無事を確認すると安堵の表情を見せていました。

ピリリリリリ…

突然誰かのケーイタイが鳴りました。かかつてきた人は…

のび太「もしもし？」

のび太君のようです。

聖奈「もしもし？聖奈です。」

のび太「聖奈さん…？無事だつたんですね。」

「どうやら聖奈さんからかかってきたようです。」

聖奈「私と咲夜さんは大丈夫なんですが……静香ちゃんが足をくじいてしまって…それに外にゾンビがたくさんいるんです。」

のび太「静香ちゃんが！？」

「……もうこうしてはいられません。僕はのび太君からケータイを取りました。」

「……場所はどこですか？」

聖奈「えっと……学校の裏庭の倉庫です。」

「今から助けに行きます。そこに隠れていってください。」

聖奈「えつ……しかし……」

僕はそこで通話を切りました。そして、のび太君にケータイを返し助けに行こうとしました。

出木杉「一人で行くんですか！？」

「はい。それがどうかしましたか？」

出木杉「無茶です！いくら星也さんが強くても大勢のゾンビを一人で相手をするなんて…。」

のび太「僕もついていきますよ。」

僕を心配してくれているんですね。ありがたいけど…。

「いいえ。僕一人で行きます。おそらく安雄君に大怪我を負わせたカメレオンが理科室にいると思います。だからのび太君たちはカメレオン討伐を頼みます。」

「ええもん」「じゃあ僕が星也さん…」

「それも駄目です。保健室にドラえもんさんがいなくなつたら安雄君は誰が見るんですか？君たちがなんと言いましても僕は行きます。困っている人を助けたいんです。」

僕はそう言い切るが…

ドラえもん「でも一人は危ない。せめて2人なら…？」
「その心配はいらない。俺も一緒に行くからな。」

「!？」

ドラえもんさんの言つひとを遮るかのよつて誰かがそつと言つこました。誰でしょうか？

龍輝「久しぶりだな。星也。」

「龍輝！」

僕は龍輝を見て驚きました。まさか、龍輝もいつの世界にくるとは…。

出木杉「ええと……そちらの方は？」

龍輝「俺は高岸龍輝だ。今日ここに引っ越してきてこの状況に巻き込まれた。」

一応別の世界にいるとは分かっているみたいですが。

出木杉「よく生きていましたね。」

のび太「両手に持っているそれは…ショットガンですか？なぜ2つも…。」

龍輝「そりゃあ2つ使うからだよ。」

「相変わらず人間離れしていますね。ショットガンを片手で打てる人なんていませんよ。」

龍輝「てめえの身体能力も人間離れしているだろ。」

いや、身体能力が人間離れしていると言われましても扉を蹴破るくらいですよ。まだ常人です。…え？常人じゃない？気にしたら負けです。

秀人「話しを戻すぞ。一体なにがあつた？」

あつ！そうでした。早く助けに行かなれば…。

「咲夜さんたちがゾンビのせいで身動きがとれない状況なんですよ。僕は今助けに行こうとしていました。」

秀人「（ここで華麗に助ければ咲夜さんはわたしに惚れるはず…。これは絶好の機会じゃないか。）待て星也。わたしも行く。咲夜さんのた…星也一人で行くのはさすがに危ないからな。」

秀人、気持ちはうれしいですが下心見え見えですよ。

美琴「私も行きます。もし、あっちで怪我人が出たしたら応急処置をします。」

えらいですね。美琴さんは、常に他人のことを考えています。秀人も少しは見習つてもらいたいものです。

龍輝「俺も忘れるな。俺がいないと全てが始まらねーだろ。」

やつぱり龍輝は自信に満ちあふれています。その自信に満ちあふれた行動に僕は何回救われたでしょうか。

「美琴さん、秀人、そして龍輝。ありがとうございます。」

僕はいい友人を持ちました。この友人関係がいつまでも続くとよかつたんですが…。

ドラえもん「4人なら大丈夫だね。救出してきてね。」

「のび太。カメレオン討伐はみんなでやるんですよ。決して1人でやつてはなりません。」

のび太「分かりました。」

僕はそう言つと学校の裏庭まで走つていった。

（学校の裏庭）

うわあ……ゾンビがたくさんいますね。70体くらいでしょうか。

「これじゃあ討伐する数が割り切れませんね。」

龍輝「割り切る？なに言ってんだ？お前、やつたもん勝ちに決まっているだろ。」

秀人「そういうことだ。お先に行くぜ。」

秀人は右手にハンドガン「レッド9」、左手にライフル「SRSライフル」を構えて攻めていきました。次に龍輝は両手にハードサポーターをつけて、さらにその両手にはショットガン「スパス12」が右手、左手に1つずつ握られていました。僕は両手にチャクラムを持っています。美琴さんは後ろで九火のコンと協力してなにかしています。最初に攻めた秀人はライフルとハンドガンを駆使してゾンビの頭を撃ち抜いています。龍輝は基本空手や八極拳などの武術を組み合わせた竜神拳法を使いゾンビたちを駆逐しています。時々両手に持っているショットガンを撃つて一気に倒していました。僕はチャクラムを投げてゾンビたちの首やら足などをぶつたぎります。チャクラムが返ってくるあいだにハンドガン「ブラックティル」を殺り損ねたゾンビに撃つてとりこぼしのないように倒していました。そして、残り20体くらいになつたところで…

美琴「みんな！焼かれたくなかったら下がって。」

美琴さんが忠告してきたので僕たちは素直にゾンビのいるところから離れました。僕たちが離れてから数秒後、ゾンビたちは全て九火のコンによつて焼かれました。

秀人「全く……えげつない技だぜ。『9つの大火』。」

また秀人が中二病くさい技名を…。ちなみに今の美琴さんの技は九火のコンと話して場所を指定します。そして美琴さんがきまつた呪術を唱えると技が発動します。発動すると指定した場所から炎があがりその範囲内にいるものは火だるまになってしまいます。ちなみに指定した場所になにもない場合は技は発動しません。技の発動が約9秒なので秀人は「9つの大火」と表現しましたみたいですね。

龍輝「お前ら何体倒した?」

秀人「わたしは15体くらい。」

龍輝「勝つたな。俺は17体。」

「僕は18体でした。しかし、1位は美琴さんです。」

美琴さんは九火を召還するとかなり強いですから。

美琴「そんなことで争わないの!怪物倒ししてるわけじゃないでしょ。」

……お、怒られました。確かに美琴さんの言つ通りです。

美琴「それじゃあ咲夜さんたちを助け出しましょう。」

美琴さんが率先して言いました。そして、倉庫を開けたら咲夜さんたちがいました。

秀人「咲夜さん!無事だった?」

咲夜「私は平気だけど……………静香ちゃんが…。」

美琴「話しさ聞いています。足首を見せてください。」

みなさん安堵の表情をうかべています。僕もホッとしています。

龍輝「そつちの2人はホントに大丈夫か?」

聖奈「はい。大丈夫です。」

バツキュー

咲夜「…………／＼／」

美琴・静香・聖奈「「「ストライク！？」」

秀人「龍輝いいいい！貴様ああああああ！」

龍輝「そつちの人は？」

咲夜「…………だ、大丈夫です。」

あれ？咲夜さんの顔が赤くなっています。風邪でしょうか？秀人はなぜだかキレイしていますし、龍輝は頭にクエスチョンマークがついています。

…………なんですか？この状況は？さっきのゾンビのときよりカオスのような気がします。とりあえず、静香さんの応急処置が終わるまで外にいますか。

第14話 救出（後書き）

星也は他人の恋愛関係にも鈍いです。 龍輝は星也ほど鈍くありません。
ん。

第15話 誰かの為に（前書き）

もう少しで学校編が終了します。バイオグラス戦のあとにオリジナ
ルストーリーを入れます。

第15話 誰かの為に

S.i.d.e 星也

僕たちは咲夜たちを助けて保健室へ向かっている途中です。僕としては早く保健室について欲しいです。なぜなら……

龍輝「はあ……。」

秀人「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死
ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死

咲夜「……／／／」

静香・聖奈「あはは……。」

こんなカオスな空気が続いているのです。龍輝はなぜかため息をつき、秀人は壊れたかのように死ねをなにかの呪文みたいに連呼して、咲夜さんはなぜか顔が赤く、静香さんと聖奈さんは苦笑いをしていました。なんか…嫌です。この空気。黙ると秀人の死ねしか聞こえきません。それにしても……いつ話しましょうか?自分のことについて……

美琴「なんでそんな難しい顔してるの?」

そんな考え方をしていると美琴さんが話しかけてきました。

「え、いや、少し考え方を……。」

僕はそう答えました。

美琴「大丈夫？ 起きたときからなんか……違つよ。いつもの星也君じゃないみたい……」

「えー？ そうですか？」

美琴「笑わなくなつたと思うんだけど……」

そうでしょうか。…………… そうですね。やっぱり自分の正体についてどこかで引っかかるつているのでしょうか。どこかで……。

聖奈「みなさん保健室につきましたよ。」

どうやら保健室についたようです。いつの間にか秀人の死ねの連呼をやめていました。この事はまた後でじっくり考えるとしましょうか。僕たちは保健室に入つていきました。保健室には白峰君とスネ夫君以外全員いました。

秀人「……怪我人増えてない？」

秀人がそう思うのも無理はないでしょう。安雄君に加え出木杉君、のび太君と怪我をしていました。

静香「なにがあつたんですか？」

出木杉「僕はカメレオンとの戦闘中に怪我をしました。」

のび太「僕は……1人で挑んで……怪我をしました。白峰さんたちが助けに来てくれたので助かりました。」

なに考へてるんですか。僕はのび太君のほうへ歩いていきました。

スパーン

「一人で行くなつて言つただろ！！」

Side 美琴

星也「一人で行くなつて言つただろ！？」

お、怒つた……あの星也君が……いつも優しく冷静な彼が怒つた。私は驚きを隠しきれなかつた。私だけでなく他の人たちもすごく驚いていた。

星也「…………もし、死んでたら……どうするのですか。」

でも、やつぱり他人思いなんだ。星也君怒つたところ初めて見た。

久々に怒りましたよ。死んだら悲しむ人がいるはずなのに……。

Side 星也

のび太「星也さんこそなんでも一人でやろうとしてるじゃないですか。死ぬのが怖くないんですか？」

死ぬのが怖くない…ですか。考えたことありません。

星也「僕が死んでも誰も悲しませんよ。だから怖くあります
バチンッ

！…！？」

怖くないと言いかけたときに誰かにビンタされました。やつたのは
…………美琴さんでした。

美琴「ふざけないで！誰も悲しまないって簡単に言わないでよ！少
なくとも星也君が死んだら私は…………悲しいわ。」

美琴さん…

秀人「星也。今のはお前が悪い。たとえ誰も悲しまなかつたとして
も命を投げ出す言い方はするな。某格闘漫画に出てくる北斗神拳継
承者の1人も「命は投げ捨てるものではない」って言つていたしな。

「
秀人…

龍輝「俺は別に死ぬなつて言わねーよ。お前の自由だから好きにす
ればいい。ただ、お前にも死んだら悲しむやつがいるつてのを忘れ
るなよ。俺はお前とずっと親友でいたい。」

龍輝…

美琴「もつとみんなを頼つてもいいんだよ。」

…………もし、僕の正体を知つたら同じようなことを言えるので

しゃつか。ずっとこのまま親友でいられるといいです。

聖奈「あのー… 一つよりしいですか?」

一同「?」

聖奈「その青いかたは… 中に誰が乗っているのですか?」

ドラえもん「……………」

いや… 聖奈さん、いくらなんでもそれはないですよ。

咲夜「なんか… 妙にかわいいわ。」

龍輝「意外とかわいいな。」

2人ともかわいいって……………まあ、かわいいですね。

ジャイアン「そうだった。聖奈さんたちはドラえもんにまだ会つたことがなかつたよな。そいつはドラえもん。いろいろあつてのび太をお守りしているロボットだ。」

聖奈「ロ、ロボット…?」

まあ、普通はそういう反応になりますよね。

出木杉「22世紀からきた猫型ロボットや。今の科学力じゃ考えられないことだよ。」

咲夜「ね、猫型…?」

聖奈「エリエモ……耳なんて…。」

のび太「わー……それは言ひかや駄目……。」

聖奈さん。ドラえもんさんの地雷を普通に踏みましたよ。ほら、ド
ラえもんさんが今にも人を殺すような顔つきになつてゐるじゃないで
すか。

聖奈「え!~♪めんなれ。」

ドラえもん「いいよ……ハハハ……氣にしてなんかないぞ。」

ドラえもんさんは哀愁漂わせながら答へました。

のび太「とりあえずドラえもんは僕たちの仲間だ。ちょっと抜けた
ところがあるけど頼りになるよ。」

ドラえもん「それのび太くんに言われたくないよ。…………よろしく
ね、聖奈さん。」

のび太君の言つたことに對してドラえもんさんはつゝこみ聖奈さん
によろしくと言つました。

聖奈「いやいやも……よろしくお願いします。」

聖奈さんはさう言つものまだ少し混乱していくようでした。ある
とスネ夫君が血相をえて帰つてきました。

スネ夫「大変だ!ジャイアン!みんな!まづこ!となつたよ。」

ジャイアン「どうした？スネ夫。なにがあった？」

スネ夫「凄い数のゾンビが一いつに向かってきているよ。あの数は100体を軽く越しているよ。しかも5分もからないうちに校門に来るよ。」

一同「…………」

スネ夫「それだけじゃない！裏庭にあのでかいカメレオンがいるんだよ。あいつ居座るつもりだよ。」

静香「そんな……」

出木杉「どうすれば……」

安雄「逃げ場がない……」

まずいです。このままじゃやられてしまします。

「みなさん。落ち着いて下さい。あわてもなんの解決にもなりません。まず、女性の方々は必要物資をジャイアン君たちが持つてきましたかばんなどに詰めて出れる準備をしてください。」

咲夜「分かったわ。」

美琴「任せて。」

聖奈「はい。」

静香「分かりました。」

「次に校門でゾンビを倒す班とカメレオン討伐班の2つに分けます。ゾンビを倒す班には僕が行きます。」

僕がそう言つとみんなは落ち着きが戻つてきました。

秀人「じゃあわたしはカメレオン討伐へ行こうではないか。」

龍輝「俺は星也と同じゾンビのほうに行くぜ。」

秀人と龍輝も決めたようです。あれ?しかし…

「せういえば、パスコードの件はどうなっていますか?」

出木杉「全部集まりました。」

「ならば出木杉君は裏口のロックの解除を任せます。安雄君は出木杉君の護衛をお願いします。」

出木杉「分かりました。やつてみます。」

安雄「ちえ。護衛か…」

安雄君少し不満気ですね。なら…

「龍輝。1番かっこいい男つてどんな男だと思います?」

龍輝「そりゃあ仲間を守る男だろ。」

「ですよねー。安雄君は不満そだから別の人にもでも

安雄「やります！」

じゃあお願ひします。」

ジャイアン（星也さん上手いな。）

よし。だいぶ役割が固まつてきました。あとは…

「君たちはどうしますか？」

スネ夫「僕は咲夜さんたちといっしょに…あべしつー！」

ジャイアン「俺たちはゾンビのほうに行くぜ。」

ジャイアン君はスネ夫君の腹を殴り言いました。スネ夫君…少し秀人の考えが入つてきました。

「ドラえもんさんとのび太君はどうしますか？」

「ドラえもん」「僕はのび太君と同じところに行くよ。」

のび太「…………僕はカメレオンのほうに行きます。そろそろ決着つけたいですし。」

やつぱりですね。ある程度は予想していました。

「それではみなさん、もう少し頑張りましょう。」

僕はそう言って保健室を出ました。このときは僕はもう決意を固

めていました。この力をみんながいなくとも…1人になろうとも…
…誰かの為に使います！

第1-5話 誰かの為に（後書き）

星也「みなさん、おなじみの星也の人間觀察コーナーのお時間です。今回のゲストはドラえもんさんです。」

ドラえもん「僕ドラえもん。ようしじへ星也さん。」

星也「では最初の質問です。好きな食べ物は？」

ドラえもん「ビラ焼き。」

星也「なるほど。確かにビラ焼きみたいな顔ですかうね。」

ドラえもん「…………（怒）」

星也「すみません。冗談です。では次の質問です。最近の悩みは？」
ドラえもん「のび太君が執拗に僕の秘密道具を頼りがちにしていること。」

のび太「ドラえもん―――ん！」

ドラえもん「すみません。星也さん。」 ドタタタタタタ
星也「……ゲストがいなくなってしまったのでこの辺で。次回まで
ごめんづくつ。」

第16話 疫病神（前書き）

今回はかなり無理やりです。すみません。

第16話 疫病神

S.i.d.e 星也

僕たちは今校門でゾンビの大群を待ち構えています。

「ジャイアン君、スネ夫君。前線には僕たちが行きます。倒し損ねたゾンビを始末してください。」

龍輝「おっ、お前がやけに協力プレイを心がけているな。さつき姫野に言われたことがそんなに心に響いたか？」

「違います。より確実な方法を言つていいだけです。…………来ましたよ。ゾンビ。」

うわあ……確かに数が多いです。まあ、余裕でしょうが。

星也「龍輝。行きますよ。」

龍輝「誰に指示してるんだ?言わなくとも分かっている。」

そして、僕と龍輝はゾンビの大群に向かっていった。

校門のほうから銃声が……。始まりましたね。

S.i.d.e 美琴

静香「美琴さん。そこの板チョコとつけて下さい。」

「はーい。」

板チョコって誰が持ってきたのよ。あ、星也君か…。
やつぱり…少し心配ね。星也君たちが強いのは分かつていいけど…
私がここにいていいのかな?私も戦いにいつたほうがいい
のじや…。

咲夜「心配しすぎよ。美琴ちゃん。」

「あ、咲夜さん。どうして…」

咲夜「顔に出てたわよ。」

…私ってそんなに分かりやすい人だけ?それとも咲夜さんが凄いだけ?

咲夜「美琴ちゃん。彼らを信用してあげて。私だって心配なのよ。
でも、彼らはそんな簡単にやられないわ。特にあなたの田那さんの
星也君は。」

「え……だ、田那さんって…そんな／＼／＼／＼」

咲夜さんの言ったことで私は顔を真っ赤にしました。咲夜さん、今は
のは絶対からかってたよ。咲夜さん隠れうだよ。

咲夜「そんな本気で受け止めなくとも…まあ、私たちにはやるべき事があるでしょう。それからこなしていくましちゃう。」

……そうですね。その通りですね。ずっと心配していくても駄目よね。
やるべき事からやっていきましょう。

Side秀人

わたしたちは今カメレオンとそのおまけであるわんわんお（ゾンビ犬）と戦っている。わんわんおはドラえもんと白峰、カメレオンをわたしとのび太というように相手を分担してやっている。しかし、このカメレオンは図体がでかいくせにして動きが速い。さらに姿まで消すからうざい!たらありやしねえ。だから、わたしはカメレオンの目を狙つてスキを作っている。そして、メインは…

秀人「のび太。今です！」

わたしがそう言つとのび太のショットガンが火をふいた。まだそんな大きな変化は見られないがダメージがないってことはないだろ。しかし、あいつの目を撃つのはいいんだがすぐに再生しやがる。どうなつてるんだ!?あのカメレオン。

Side龍輝

戦闘開始から5分くらいだろうか。俺と星也の連携プレーで300体いたであろうゾンビが100体くらいにまで減っていた。でも、

ジャイアンたちの銃の弾がきれてしまつたらしい。じゃあ俺たちだけで…

星也「龍輝。君はカメレオンのほうに行つてください。ジャイアン君たちも弾の補給をしたらカメレオンのほうに行つてください。」

「星也！お前なに言つてんだ！？一人じゃ無茶だ！」

星也「ジャイアン君。保健室で安雄君がいたらこっちに来るようになつておいでください。」

……なるほど。こっちの人員を2人にして、あとはカメレオンに行けつてことか。

「…………分かつた。でも無理するな。」

星也「そんなこと分かつていますよ。」

こいつは分かつていてもやるから怖い。そんな不安を抱き、裏口へ向かうのだった。

Sideのび太

「秀人さん！」

秀人は一瞬のスキをつかれ、カメレオンにふとばされました。

「しまつた！」

僕もスキをつかれ、ショットガンを落としてしまった。もう駄目かと想つたら…

? 「うおおおおおおおお！」

勢いよく開く扉の音と共に出てきたのは安雄だった。

安雄「喰らいやがれ————！」

そう言ひと安雄はカメレオンにめがけてグレネードランチャーを連射した。

安雄「これで終わり

? 「のび太！」

ぐへつ！

安雄のトドメを遮るようにジャイアンたちが入ってきた。安雄はジャイアンにふつとばされていた。

のび太「ジャイアン！ 龍輝さんも！ 星也さんはどうしたんですか？」

龍輝「今はおそらく一人で戦っている。保健室に出木杉だけがいたからおかしいと思つたらこっちに来ていたか。」「

龍輝さんが事情を話してくれました。

秀人「龍輝。カメレオンは誰のおかげか知らんがもう虫の息だ。殺つてしまつぞ。」

龍輝「言われずとも分かつている。」

すると龍輝さんはカメレオンにむかって走り出した。カメレオンの攻撃をかわし跳び蹴りを喰らわせていた。カメレオンはふつとび、壁に衝突した。星也さんといい、本当に人間ですか？次に秀人さんが悶えているカメレオンの目をライフルで正確に撃ち抜く。

スネ夫「のび太！こいつでトドメだ！」

スネ夫はグレネードランチャーを投げてきました。……あれ？ 安雄のじゃなかつた？ 僕はそんなことおかまいなくグレネードランチャーレをカメレオンに向けた。

のび太「これでえええええ！ 最後だああああああああ！！！」

僕はカメレオンにグレネードランチャーを撃つた。カメレオンは首が吹き飛んで絶命した。そのときに咲夜さんたちも来た。

聖奈「…………倒したのですか？」

龍輝「ああ。倒したぜ。のび太がな。」

静香「凄い！ のび太さん。かつこいいです。」

し、静香ちゃん。おだてないで。照れるから…。

？「へえー。あのバイオグラスを倒したのね。すごいわー。」

僕たちが喜び合っていると突然女性の声が聞こえた。静香ちゃんたちの声ではない。じゃあ、誰だ？その疑問を頭に浮かべ声のした所をふりむけば1人の見知らぬ女性が立っていた。

龍輝「あ？誰だお前？」

？「あら、年下のくせに無礼ね。まあ、いいわ。名前だけでも言っておくわ。私の名前は才川絢乃！」

星也「死ね。」

！――？ちい。「

そこで星也さんが出てきて絢乃と呼ばれる女性に殴りかかっていた。

Side 星也

僕はゾンビ100体を倒して裏口に向かいました。すると僕を除くみんなが集まつていました。しかし、裏口にいる女性は……あいつは！？やつと見つけた！俺はあいつの顔面を殴りかかつたがすぐ反応し、惜しくも当たらなかつた。しかし、俺はそこから奴の腹を蹴飛ばすとふつとんだ。

のび太「星也さん！」

「みなさん。大丈夫でしたか？」

俺は敬語で聞いた。みんな大丈夫そうなので少し安心した。

「……………4年だ。やつと見つけた。」

美琴「…………星也君？」

やつぱみんな驚いているな。そりゃそうだ。今の俺の言葉からは怒りが満ちているからな。

絢乃「…………星也か。…………全く。少しば敬つてほしいものよ。」

「やだね。お前らを敬うなんて……。」

出木杉「星也さんーやはり彼女を知つてるのですか？」

「ああ。奴らは俺の故郷とこの街をこんなことにした張本人の一人だぞ。自分の為なら他人の犠牲をいとわない最低な連中だ。」

絢乃「最低？いいえ、私たちは世界を正しい方向に向けようとしているだけよ。」

「お前らにとつてだる。正しつつうけど結局はあんたらの都合良くなしたいだけだろ。」

絢乃「うるさいわね。疫病神のくせに正義を否定するな。」

秀人「疫病神！？どうして星也が！？」

絢乃「どうしてってあの「黒いクリスマス」が引き起こる原因とな

つたのは星也よ。」

星也「…………。」

龍輝・美琴・秀人「…………？？？」

他の人「？」

……ちつ。あいつ余計なことを…。まあ、事実だけどな。

絢乃「星也があるものを持つていなかつたら、「黒いクリスマス」なんて起こらなかつたのに…。」

美琴「星也君ー本当なの？」

「…………本当だ。」

秀人「そんな…。」

もう駄目だな。また俺は一人になるな。それでも…

「確かに「黒いクリスマス」が引き起こる原因となつたのは俺だ。俺があんな刀を持つてなければ多くの人は死なかつた。でもなお前らはその「黒いクリスマス」と同じことをやつてているぞ。自分の欲望や望みのために他人を犠牲にしている。それなのに俺とどつちがタチが悪いなんか比べるのはどんぐりの背比べだろ。別に罪滅ぼししるとは言わねーよ。でもな、親友を殺したお前らとじいちゃんを殺した滅魄だけは絶対に許さねー！」

もう一人になつてもいい。どうなつてもいい。絶対に殺す。

絢乃「ふーん…。別にそつ考えてもらつて結構だけど……あなた1人で何ができる…

? 「いいや。星也は1人じゃねー。俺がいる。」

! ? 「

そう言つて俺の横に黒いフードをかぶつた男が現れた。

絢乃「…………あなたは誰?」

奴が言うと男はフードをとつた。フードをとると俺がよく知つている赤い髪がシンシンに立つていてる男がいた。まさか…

? 「俺の名前はリア。記憶したか?」

彼はリアと名乗つていたが俺の親友のアクセルそのものだった。

第16話 疫病神（後書き）

NG集 その3

（オ川絢乃登場より）

龍輝「あ？お前誰だ？」

絢乃「あら、年下のくせに無礼…

秀人「（ちや）ちやとうるせーーー！」

ぎゃあああああ…」

秀人「誰が無礼だ！紳士にむかって失礼だぞお前！」

ドカツ ベキッ ドゴッ…

秀人「ふう、スッキリした。」

龍輝「おい、そいつ明らかにお前のこと言つてないぞ。」

秀人「え……マジか…すまっせーん。」

龍輝「それが紳士の謝り方か？」

絢乃「ホント無礼ね。」

龍輝「あれだけ殴られて立つのかよ！もう賞賛に値するぞ。」

絢乃「私の名前は…」

星也「天誅…………」

ドキヤツ

ぎやああああああ…」

龍輝「また！？」

秀人「あの人災難すぎるだろ。」

絢乃「…………もう帰る…。」

星也「流石に折れたか。」

秀人「名前すら言わせてもらえないとは哀れだな。」

龍輝「お前ら2人のせいだろ！…！」

第17話 GIVE ME LIGHTING (前編)

今回のあとがき「一ノ瀬」はあつません。しかし、あとがきを見てください。

第17話 GIVE ME LIGHTING

Side星也

「アク……セル？」

な、なぜだー？アクセルはあのとき俺を庇つて死んだはずーな、なぜ生きている？

リア「星也。それは俺のノーバディの名前だ。俺はリアだ。記憶しつけよ。」

「でも、リア。なぜアクセルを知っているんだー？あのときにアクセルは死んでいる！」

俺はこの目で見た。アクセルが俺を逃がすために最後の力をふり絞つて闇の回廊を開いて倒れたところを…。俺ははつきりと見た。

リア「九死に一生を得た…………とでも言つておこひづ。俺のノーバディであるアクセルはあの後にある者に助けられた。」

「ある者って誰だ？」

リア「今はそう言つておく。のちに話す。そして、助かったアクセルは本体である俺リアと会い、元に戻った。んでアクセルの記憶は俺が受け継いでいる。だから星也。お前のことも分かる。」

「…なるほど。」

俺がアクセルを殺したかと思つてあの後やるせない気持ちでいつぱいだつた。それが少しむくわれた気がした。

リア「よし。じゃあ武器返せ。」

「…………はあ？」

リア「いや……だから、あんとき俺の武器預ける言つたじゃねーか。だから……な。」

「言つてた……け？」

言つてたっけな……。なんかそう言われるとそういう気がしてきた。

リア「その顔は覚えてない顔だな。お前は相変わらず大事なことすがすっぽ抜けるな。」

そんなこと言われてもなあ。困るぜ。

リア「じゃあ、交換だ。これがなんだか分かるだろ？」

リアはやつと漆黒の刀を出した。それって……

「魔刀『阿修羅』…………ビツしてそれを……？」

リア「ある者が俺を通じてお前に渡せと言われている。」

なるほどな。ある者は俺が『阿修羅』を焼かれたじいちゃんの家跡に隠したと知っている人か……。

「分かつた。いいよ。」

俺はそう言つてリアにチャクラムを渡し、俺はリアから『阿修羅』を受け取つた。

Side秀人

星也……お前はホントに何者だ？あの「黒いクリスマス」の発端だつて言われているし、あの刀は悪魔にしか使えないと言われている魔刀だろ。そんなものと自分の武器を交換つてなに考えている？あとできつちり話してもらおう。

Side星也

さて、魔刀も手に入つたしそろそろ忘れきられている奴を倒すか。

「じゃあ……開戦だ！」

ガチッ

ん？

ガチッ

あれ？

ガチッ ガチッ

ぬ、抜けない！？

リア「ビーブリした？ 星也。」

「刀が抜けない…。」

リア「はあ？」

なんで抜けないんだ？ 久しぶりだから？ そんなわけないか。ビーブリ
よつ…。あ、そうだ！

「リアはなんでだと思つ？」

リア「知らねえよ…………なんで俺に聞いた！？」

そ、そんな… ゆ、唯一の希望が…。まあ、期待してなかつたからい
いけど。

リア「じゃあ俺に聞くな…………」

な、なに…？ 僕の心を読んだ… だと。完全になつて読心術を扱える
ようになつたのか。

リア「声に出てるんだよ…………」

ビシッ

リアは俺の頭にチョップした。

なんだ?なんかコントが始まつていなか?そして、俺らが空氣になつてゐる……。それは仕方がないにしてもあいつらかなり余裕そうだがなにか策があるのだろうか?星也。あとでたつぱり話してもいいつや。オ川家のこと。お前が秘密にしていろ」と。

S·i·d e 星也

参つたな……。どうせつて戦おつへ

リア「刀が抜けないなら仕方がねー。魔力で武器を作れ。」

リアはやつてやつてのやつ方が分からねーもんな。どうしきみつもな
い。

「……どうあればできる?」

リア「お前がチャクラムを出すときの感覚で魔力を固めろ。」

ふーん。なるほど。でもね……

「リアのチャクラムのよひにでれるかどうか……」

リア「同じだ。とにかくやつてみな。やつてやつてお前に合つ武器ができるはずだ。」

……じゃあひよつとやつてみよつか……。俺は両手を広げ魔力を集め

る。するとリアのチャクラムのようないわく武器が形作られてきた。そして、リアと同じ形の黒と青のカラーリングを施されたチャ克拉ムができた。

リア「お前も俺と同じようなチャ克拉ムか…。そういう『氣』が

「まだだ。」

「！…？」

もう一つ武器を作つていない。なぜかそういう気がした。俺は右手を前に出し、さっきの魔力を集めるような感じで光を集め出す。そして、十分に集まつたところで言い放つた。

「LOST THE DARKNESS · GIVE ME LIGHT

そう言い放つと魔刀『阿修羅』は粒子となつて消えた。そのかわりに右手から目がくらむほどの光を発し、魔刀『阿修羅』と対照な真っ白な刀があつた。俺はその刀を勢いよく抜く。魔力とは違う何かを感じた。これは…もしかして？そう考えるがすぐに記憶の端にしまう。

「リア。下がつてろ。」

リア「はいはい。分かりましたよ。」

俺が言うとリアはだるやうに龍輝たちのところまで下がつた。それを確認したら、奴に言つた。

「…行くぞオ川家。今日からお前らの墮ちるときだ。」

奴は俺の殺意を感じて戦闘体制に入った。お前らが馬鹿にしてきた
俺の力を見せてやる！

第17話 GIVE ME LIGHTNING (後書き)

『ドランモン のび太のバイオハザード イレギュラーな者たち』を読んでくれているみなさん。ゼクセルです。今回からオリジナルやこのキャラに装備させたい武器の募集をします。みなさんよろしくお願いします。

第18話 悪魔と神の力を受け継いだ者の末裔（前書き）

今回は少し描写に不満があります。お許しを。

第18話 悪魔と神の力を受け継いだ者の末裔

S·i·d·e 紗乃

なんの…。一体なんの?まるで今まで殺氣を抑えましたと言わんばかりの殺意が星也の体からほとばしっていて。落ちこぼれの分際でどうして私たちにはむかうの?私には全く分からぬ……。

「星也…誰にものを言つてるのかしら?落ちこぼれのあなたと才能に恵まれた私とでは実力の差がありすぎるわ。引くなら今…」

星也「いやいやひつるせえ。時間の無駄だから早く来いよ。ぶつ倒してやるからだ。」「

…ふーん。」

何て生意気なの?まあいいわ。ここで実力の差つてものを教えてあげるわ。

S·i·d·e 星也

俺が早くしりつて言つたらよつやく動き出しあがつた。つたくお前らの御託は聞き飽きた。奴は氷を作り出して鎧として自分に纏い、右手に氷で一般的な剣を、左手には氷で一般的なハンドガンを作り出した。

スネ夫「な、なんだ！？あれば？」

ジャイアン「何もない」とから武器が出てきたぜ。」

……違う。それ違う。リアは分かつているけど他の人は分かつていはないな。あの顔は。

「違うぞ。あいつは空気中の水分を集めてそれを氷結させることによってあれを作り出している。すなわちあいつは「水分を氷結させる力」を持つている。」

一応みんな納得したようだつた。最後に言つた「力」についてドラえもんとかは疑問に思つてゐるようだが……。

絢乃「へえ～。落ちこぼれのあなたが私の能力分かつたのね。まあ分かつたところで何にも……

「お前にハンデをやるよ。ハンデがなかつたら俺に圧倒されて才川家の名に傷がつくからな。」

「！」

俺は奴の言つことをもえざるよつと黒いチャクラムで地面に円を書き始めた。そして、書き終わった。

「俺は！」の円から出ねー。お前は自由に動くといい。

絢乃「ナメた真似を……」

「あと、忠告をしどいてやる。みんなを人質に取るのは得策じゃな

いぞ。リアは俺より強いからな。」

よし。これで奴はみんなに手を出さないはずだ。俺は刀を右手に持ち、その鞘を左手にダガーナイフのように持ち、黒いチャクラムを魔力でうかばせる。

「あ…………来いよ。」

絢乃は俺に向かつて氷のハンドガンを連射してきた。しかし、所詮ただのハンドガンに過ぎない。その遅い弾を刀で弾く。そして唱える。

「刹死^{さうし}40 … 刹死^{さうし}50 …」

俺はそう唱え続ける。奴は少し不信そうだがすぐに切り換える。俺との距離をつめて氷の剣で斬りつけてきた。これも遅すぎる。俺は鞘で奴の攻撃を防ぐ。そして、2つのチャクラムで斬りつけようとしたがあちらはなんとか回避していた。そして俺は唱え続けた。

S i d e 美琴

星也君が戦い始めて10分くらい経過した。絢乃という女性の猛攻をいとも簡単に防いでいるけど自分から攻めようとしていない。何か考えがあるのかな…。しかし、星也君はなにを唱えているの?呪術ではなさそうだし…。私はリアという男の人訪ねてみた。

美琴「リアさん……でしたよね。星也君はさつきから攻撃を防ぐこ

としかしていないのですけど… なんでか分かります?」

リア「ん? なんだお前は? 星也の友達か?」

美琴「はい。姫野美琴と申します。」

私はかるく自己紹介をした。

リア「そうか。俺の名前はもう知ってるな。それにしても星也はこのなかわいい子とも友達になつてたのか。」

美琴「えつ／＼／＼

私はいきなりかわいいと言われ顔に熱が集中してしまった。

リア「ハハハッ、まだガキだな。」

リアさんは笑いながら言った。

リア「…で星也はなんで攻撃を防ぐことしかしてないか? あれもハンデの一つだろ。」

一回「…………? ? ? ?」

リアさんの発言に私を含むみんなが驚いた。

龍輝「おい、待てよ。ハンデは田の中しか動かないんじゃないのか

?」

と高岸君がリアさんに質問した。確かに戦うときにはやう言つてしま

したね。

リア「おそらくハンデでもあるし、実力の差を見せつけるって意味もあるだろう。俺は星也の能力を全て知っている。だからこそあの行動もハンデじゃないかと推測できる。」

ドラえもん「能力ってなんですか？」

リア「あ…まずい。言っちゃダメだった。まあ、この際いつか。能力ってのは常識にとらわれない力のことだ。一般的に「アビリティー」って呼ばれるものだ。絢乃って奴で言えば「空気中の水分を氷結させる力」だ。これは常識的に考えるとありえないことだろ？そういうような常識外れな能力を星也も持っている。」

リアさんが説明するとみんな少しどまどまじっていましたが分かつたようです。

秀人「じゃあ星也の能力はなんなんだよ？あいつ自分で「チャクラムを操作できる力」って言ってたぞ。他にあるのか？」

中村君がそう聞いた。するとリアさんは先ほどまで星也君が持っていたチャクラムを出した。

リア「それは武器 자체に備わっている能力だ。厳密に言えば星也の能力ではない。あと、星也の能力は……まだ言えないな。」

秀人「なんでだ？」

リア「それじゃあ戦い見てておもしろくないだろ？」

リアさんは中村君の質問に答えました。 答えたら、星也君のほうを向いて

リア「星也あ！遊んでねーで早く終わらせろー！暇でしちゃうがねー！」

リアさんは星也君に叫びました。…遊んでたの？

Sideリア

つたく…星也。こつまで遊んでんだよ？待ちくたびれたぞ。

のび太「遊んでるってどういう意味ですか？」

メガネをかけたダメダメそうな少年が聞いてきた。

「そのままの意味だ。あいつならあれくらいの奴は5分もかからない。それを10分以上もかかっている。どう考えも遊んでるようになんねー。」

俺がそう答えるとメガネは分かつたようで黙っていた。ああ～。つまんねー。

Side星也

「そろそろかな…。それでは貴様に絶望を『』えてやる。」

俺はそう言い『白い刀』を使い、奴に向かつて斬りつける。普通の刀なら届くはずもないが白い刃からは白い刃が生じて奴に向かつていた。奴はあわてて回避していた。俺は間髪入れず奴に白い刃を飛ばす。白い刃と言つても某ジャンプ漫画の海賊王を目指している部下の刀使いみたいに飛び斬撃を繰り出しているというイメージでかまわない。奴はなんとかよけていたがだんだんと数が多くなるにつれ、よけられなくなっていた。俺の斬撃は氷の鎧もろとも奴自身にもダメージを与えていた。奴はそれに驚いた表情で俺に問う。

絢乃「なぜだ!? 私の氷の鎧は鉄よりも硬いはず! ? なぜお前にときの斬撃に?」

「馬鹿だ。まるで分かつていな。」

「…よく斬り口見てみろよ。」

俺がそう言つと奴は鎧についている斬り口を見た。その斬り口の周りの氷は確実に溶けていた。

絢乃「そうか……悪魔の力か…。」

「いや、違うな。悪魔の力じゃない。俺が受け継いだもう一つの能力によつてだ。」

俺の言つたことに對しリアを除くみんなが?マークを浮かべていた。

「俺は悪魔の力だけじゃない。神『迦楼羅』の能力『熱操作』も持

つていい。「

Sideリア

秀人「熱操作?」

俺は今星也の能力を説明している。まあ、説明しなかつたら質問責めになるからな。

「ああ。星也の母親は迦楼羅の力を受け継いだ者の末裔だったんだよ。でも、それほどの力を操れる者は今まで初代の人以外いなかつたんだよ。でも、星也は悪魔であるから体は強いんだ。だから、迦楼羅の力を操ることができるものだ。」

俺は今の星也の力について説明した。

龍輝「ちょっと待てよ。あいつ悪魔もあるんだろう?じゃあなんで神の力も使えるんだ?」

最もな疑問だな。神と悪魔はお互い対極な存在だもんな。例えるならコインの表と裏だ。だから両方使えるなんて実際にはありえない話だらうな。

リア「でも、あいつは不思議なことに神と悪魔の力の比率がちょうど1:1で保たれてるんだよ。それを可能にしているのはあいつの家系と強い思いからだらうな。」

出木杉「ち、ちょっと待ってください。星也さんの家系つて?」

お。なかなかいいとこ聞ぐじゃねーか。

リア「星也は父親が魔王の末裔、母親が迦楼羅の力を受け継いだ者の末裔のあいだに生まれた子どもだ。神と悪魔の力の比率を保てるのはそれも一つの理由だと考えている。」

魔王を知っている者は驚いた表情を、魔王を知らない者は呆けた表情をしていた。全く分かりやすいもんだぜ。

リア「ほら、見てみるよ。決着がつくぜ。」

S.i.d.e 星也

奴が俺の能力を知つても俺の優勢には変わりなかつた。まあ、当然か。

「さつきてめえ言おうとしてなかつたか? 能力を知つても無意味みたいないじと。まさにこの状態だな。無様にもほどがある。」

絢乃「私を無様にするためにさつきの10分攻撃しなかつたのかしら?」

「へえ…。分かつてんじやん。まあ、今さらつて感じだな。

「それもあるが実際は「熱操作」が平温から最大何 上がるかを調

べるためでもあるんだな。さあ、長くなつたこの戦いも終わらせてよ
うか。」

俺はそう言い飛ぶ斬撃を無数に飛ばす。奴は飛んでよけるがそれが狙いだ！

绚乃「な……！ チヤクラム！？ いつのまに？」

奴といえども空中では身動きが取れまい。

総乃一星也ああああああああああああああ

あなたの敗因は僕が相手だったことだ。

魔力で操った2つのチャクラムが奴をクロスするように斬った。奴は地面にうつぶせになる。俺の手元から黒いチャ克拉ムが消える。

星月 - LOST THE LIGHTNING.

そう詰うと由い方も光となつて消えた。

絢乃「星也……覚えておくと……いい。あなたの……やつた」とせ
才川家への裏切りだ。あなたを……殺しにくるわ……。」

ちつ。まだほざいてやがる。俺には意味のねーことだ。

「言つておくが俺は才川家に属した覚えがない。俺は黒牙舜刃だ！」
覚えておけ！」

俺はあのときに黒也から聞いた本当の名前を言って切り返す。奴は

俺の言葉を聞くと無言で黒い渦を作り出してその中に消えていった。やはり奴らが俺を連れて来たのか。それにしてもやつと終わつたか……。

美琴「星也君……。」

美琴さんは僕を見て真実を話してといつて見てきました。みんなも美琴さんと同じよつです。

「はい。みなさん、僕の真実や正体のこと話をします。まず、僕は…………悪魔なんです。」

第1-8話 悪魔と神の力を受け継いだ者の末裔（後書き）

星也「みなさん、行きますよ。セーの…」

一同「あけましておめでとうございます……………」これからも『ドリーム のび太のバイオハザード』 イレギュラーな者たち『』をよろしくお願いします……………」

ところが今や今年もよろしくお願いします…

第19話 舞刃（墨也）の過去（前書き）

今回は回想シーンに平仮名ばかりで読みにくいくらいと思います。すいません。

第19話 舜刃（星也）の過去

僕は悪魔ということをみなさんに言いました。

「改めて自己紹介をします。僕の本当の名前は黒牙舜刃です。魔王・黒牙滅魄の末裔です。もつ隠すことはありません。質問したかつたらしても構いません。」

改めて自己紹介をしました。質問に答えると言いましたがみなさん黙り込んでしまいました。しかし、ドラえもんさんは沈黙を破つて聞いてきました。

「ドラえもん、まず、星、世界のことについて教えて。」

ドラえもんさんがそう言つてきました。だから、僕は話しました。星のこと、世界のこと、そして「黒いクリスマス」のこと。かなり非現実的な話なのに真剣に聞いてくれていました。

「…というわけなんです。だから僕やリア、美琴さんは異世界の人間なんですね。」

異世界からきた人以外は少し驚いていました。まあ、当然です。

「び太」「黒いクリスマス」ってなんですか？」

のび太君が聞いてきました。

「「黒いクリスマス」は僕たちの世界で起こった魔王の黒い炎による大量虐殺事件のことです。その日はクリスマスで聖なる夜に魔王

の黒い炎によつて辺りが黒くなつたことからそれを呼ばれています。「

僕はのび太君の問い合わせに答へました。

美琴「それで私は家族、中村君は弟を、高岸君は兄と母親を失つたんです。」

美琴さんは僕に續くように言いました。

「僕はじいちゃんとばあちゃんを失いました。まあ、自分で殺したんですがね…。」

一同「…………？」

僕の言葉で少しづつきました。

秀人「どういうことだ？お前は確かにじいちゃんを尊敬しているみたいのこと言つてなかつたか？」

「はい。僕はじいちゃんを尊敬していました。魔王が憑依しなければじいちゃんは生きていました。あれさえなれば…」

（～10年前）

舜刃 6歳。

舜刃「ねえねえ、じいちゃん。なにそれ？」

じいちゃん「これが？これは刀と言つてな…いろんなものを守るために作られているんじゃ。」

舜刃「いろんなものってな～に？」

じいちゃん「それは自分で見つけるんじゃ。」

舜刃「ふーん…」

（現在）

舜刃「じいちゃんはいい人でした。僕に存在意義や努力することなどを教えてくれた人でした。」

本当にあの頃が悪魔扱いされていたけど良かったです。

秀人「じゃあなんでじいちゃんを殺したんだよ？」

「…………じいちゃんは「黒いクリスマス」の日に死にました。
僕が魔刀「阿修羅」を持っていたのと僕という存在がいたせいで……」

）10年前「黒いクリスマス」（

じいちゃん「そうか…滅陥のやつあの刀を本氣で……。」

舜刀一
?

「じいちゃん、舜刃！お前はこの刀を持って早くどこかへ逃げるんじや……渡せ言われても誰にも渡さず逃げるんじや……」

え？ なんでぼくだけ？

舜乃「じいちゃんは？」

じいちゃん「わはまだやる」とある。先に行くんじや。」

なんで... なんでいつしょにいがてくれないの? いつしょにこんなこといつたじやん。

舜刃「イヤだイヤだ！じいちゃんどこでしょこるー。」

じこちゃん「ばあさん、舜刃を頼んだ……ウグッ……」

ばあちゃんはうなずくとじいちゃんのよつゆがくるしさうになつた。

舜刃「じこちゃんー？」

じいちゃん「もうか…………。ばあさん！わしに構わず舜刃を連れて早く逃げるんじやーー早くー！」滅魄「あ？俺はじいちゃんなんかじやねーぞ。お前ら黒牙家の始祖黒牙滅魄様だ。」

めつかい？だれそれ？きいたことないよ。

ばあちゃん「滅魄や。早くじいさんを返しておくれ。」

滅魄「うるせえなーババアーー！」

ボオッ

ばあちゃんはめつかってひとひどこひげあちやんはくろこのおにつつまれてもえてしまつた。

ばあちゃん「ぎやあああああ……」

舜刃「ばあちゃんー！」

滅魄「俺にはむかうから」んなことになるんだよ。さあ、俺の目的はお前の持っている刀だ。それを貸せ。ババアみたいになりたくないだろ？」「

でも、このかたなはじいちゃんにだれにもやるなつていわれたから
…こんなひとにはあげれない。

舜刃「いやだ…ばあちゃんをかえせ…」

滅魄「まだそんな口が聞けるか。なら…」

ボオッ

舜刃「な、なにこのくろこぼのおは…」

滅魄「な、なに…?俺の黒い炎と適合しているだと…?…」
はおもしろい。ババアみたいになりたくないだろ?」

舜刃「いやだ…ばあちゃんを返せ…」

滅魄「まだそんな口が聞けるか。なら…」

ボオッ

ぼくのからだからもくろいほのおがでるがあつくもいたくもなかつ
た。むしか、なんかまとつているかんじ?

舜刃「な、なにこの黒い炎は?」

滅魄「な、なに…?俺の黒い炎と適合しているだと…?…」
はおもしろい。ここつ」と魔界に連れて行こう。」

「い、いやだ…ぐ、くるな…」

でも、めっかいはぼくのくびをつかむといえのなかでもひらけたば
しょにいき、なにやらわけのわからない」とばをいいつと、ゆかに
こわいとびらができた。

滅魄「魔界の門だ。これが作れるのは俺と俺の幹部だけだ。さあ、

來い。

めっかいはてこいのするせくをむりやりひつぱつていった。とかくうにかがみがあつ、ぼくのすがたをうつしだした。みたら、ぞつとした。まるであくまのようだつたから。

舜刃（これが…ぼくのすがた？まるであくまだ…）

滅院——さあ、来い！早く！」の刀とともに全世界を手にする！』

わのとれ

なにかかわったおとかした

瀬院 な お の れ 衛 の あ あ あ あ あ あ あ あ あ

じ
じ
し
た
ま
ん
?

じいちゃん、舞乃はねしの孫じや。返事もらおう滅院。

滅魄「馬鹿め、自分は魔界の門に飲まれ始めているのだぞ。それで
は、お前が消滅するぞ……」

じこちゃんが…じこちゃんが…どうしようもこのとおりにあのふたな
がめにはいった。これでなにじこちゃんをたすけられるかもしけな
い。

舜刃「じいちゃん！しないで！」

そのかたなをぬくと…………あのへりこせのぬみひつけにいた。

舜刃「りやあああああ……！」

ぼくはくろこほのおをまとつたかたなでこわいとびらをきつた。すると、きつくちからくろこほのおがでこわいとびらをやさきつた。とびらはしょうめつしたけじぼくがすきだつたじいちやんは……しんでしまつた。ぼくのあたまのなかでじいちやんとのこらんなきおくがよみがえつてきた。

舜刃「じ…………じいちゃん……。」

そのときぼくはあたまがわれるほどのいたいにおそわれた。

黒也「よお。」

舜刃「ぼく？」

黒也「せひ、俺はお前だ。お前の闇が具現化した存在だ。」

くわやとこわもつらとつのぼくが自己紹介をした。

黒也「時間がねーから簡単に説明するべ。お前は眠っている力を起こしてしまつた。」

ねむつてこむちから?・あのくろこほのおの」と?

舜刃「あのくろこほのお?」

黒也「それもだが同時に迦楼羅の力の「熱操作」も起こしてしまつた。そこで選べ。今のままじゃお前は一人だ。今のお前だと一人じ

やあ確実に死ぬ。だから、俺には「熱操作」と魔力、魔刀「阿修羅」に黒い炎を閉じこめることができる。ただし、それにはいままでのお前の記憶を俺にやらなければならぬ。まあ、どうする?」

そんなのこきなりいわれても…………（苦悶中）…………よし
決めた!

舜刃「ちからをいらつじこめ。でも、ひとつやくもく。ちからとおぐはせぐがひとつでやれるよつになつたらかえして。」

ぼくのたこせつなじこひさんをいじついためつかいがゆるせな。

黒也「…………そのあとどうするんだ?」

舜刃「めつかいをたおす。」

黒也「…………ねもしりこ。よし、約束だ。じゅあまよはお前の記憶をひきかえに力を封じ込める。」

すねとぼくのあたまのなかがまつしりになつていつた。

黒也「……よしつできただ。新たな名前へりこまつておへか。お前は今口から星やだ。」

くひやはそれをこうとがとおくなつた。きがつくとぼくはくほほのおでもえているこえのまえにこた。なぜかなにもないのことでもかなしかつた。そして、そのあとこれがわとこうこえにひきこられた。

第19話 舜刃（星也）の過去（後書き）

舜刃「さて、星也の人間観察コーナー改めまして舜刃の人間観察コーナーです。今回のゲストはリアです。」

リア「よお。リアだ。記憶したか？」

舜刃「さあ、リアにまず一つ目の質問です。好きな音楽の種類は？」

リア「そうだな…やつぱりロックかな。」

舜刃「なかなか見た目通りです。次の質問です。嫌いな食べ物は？」

リア「苦いものだな。」

舜刃「やはり気がありますね。僕もです。それでは最後の質問です。好きな言葉は？」

リア「そりゃあ「記憶」だろ。」

舜刃「それは…

龍輝「リア！バスケ部入れー！」

すまん。舜刃。」

シユツ

龍輝「舜刃、リアは？」

舜刃「さ、さあ？」

龍輝「リアー！」

舜刃「それではこれで今回は終わりです。次回まで

秀人「ゆっくりしていってね～」

第20話 信用（前書き）

今回は後半が会話文ばかりです。すいません。

第20話 信用

（現在）

Side 舜刃

僕は自分の過去をみなさん打ち明けました。やはりもうここにはいられないのでしょうか？

秀人「オ川家にひきとられた後はどうなった？」

舜刃「彼らは努力をする人を人外のよう扱う集団なので僕は迫害されていました。しかし、リアのノーバディであるアクセルがいてくれたので人間として腐ることはありませんでした。」

龍輝「アクセルは庇つて死んだってのは？」

舜刃「彼らは4年前に自分の街を壊滅させました。」

秀人と龍輝の質問にそれぞれ答えました。

龍輝「知っているぞ。俺らの世界で起こったあの地下工場の爆発事件だろ？確かにあれはデマだと思つたがどうやってやつたんだ？」

舜刃「なにも。なにも使っていませんよ。彼らの力だけで。」

一同「…………？」

僕の言葉に一同ざわめきました。

咲夜「じ、自分たちの力だけで…それってさつき説明した「アビリティー」で？」

舜刃「そうです。彼らの破壊対象は才能なき者とし街をいまこのよくな状況にして破壊しました。そして、その対象は僕もでした。逃げる際に相手の攻撃をアクセルは庇つてうけました。そして、最後の力で闇の回廊を開いて死んだと思っていたんです。」

美琴「それで闇の回廊を通ると私たちの街についたことがあります。」

舜刃「その通りです。」

才川家のやつたことと僕が美琴さんたちの街に来た経路を言いました。

聖奈「じゃあこんなことになつた原因は知らないのですか？」

舜刃「すみません。それは分かりません。この状況は彼らの「アビリティー」によつて作られているのか、なにかウイルスや薬などのせいなのかは分かりません。」

聖奈さんの質問にそう答えました。

舜刃「他に質問はありますか？」

一同「…………。」

ないようですね。ではお別れです。

舜刃「…………リア、行きましょう。」

リア「どうくだ？」

舜刃「才川家をおしにです。」
「あなたとはお別れです。」

一同「！？！」

みなさんやはり驚いています。しかし、悪魔と人間は仲良くはできない関係ですから、仕方があります。

美琴「ど、どうして…？」

舜刃「美琴さん、悪魔と人間は仲良くはできません。だからなにがどうであれ僕はここから離れなければなりません。それに才川家と僕の戦いにみなさんを巻きこみたくはありません。」

僕は別れる理由を言いました。あれ？なぜでしょ？・目頭が熱くなつてきました。

リア「いや、今のお前でも才川家は倒せないぞ。それでも行く気か？」

舜刃「はい。」

リア「でも俺は闇の住民じゃねーから闇の回廊は開けねーぞ。」

あれ？そつなんですか。ではどうしましょ？

龍輝「闇の回廊を出すつもりはない。星也…じゃない舜刃。一言言わせてもらひうぞ。クソくらえだ。そんなもん。」

……ええ！？ 1言言つたのに2言言いましたよ！？

龍輝「あのな、確かに俺は悪魔は大嫌いだ。でもな、お前が悪魔の末裔だからってここにいたら駄目な理由はないぞ。まず、悪魔はそんな人のことなんて考えもしない。ただ殺すことを考えたマシーンみたいな感じだ。でも、お前はどうだ？人の為になろうと必死になつて考えて動き、悪魔の力も俺たちを守るために使つてくれた。そんな奴が悪魔？違うな。悪魔の力を持った人間だ。人間なんだからここにいてもいいんだぞ。」

舜刃「し、しかし、才川家が…

秀人「心配するな。」

秀人？」

秀人「才川家のこんなふざけた行為を見逃すわけには行かないな。お前が一人で行つたとしてもわたしは行くぞ。」

ジャイアン「そうだよな。舜刃さんはすぐかつたもんな。」

スネ夫「アニメの映画かと思っちゃつたよ。」

秀人の言葉に続くようにジャイアンとスネ夫が言つた。

舜刃「み、みなさん…僕が怖くないですか！？ 悪魔ですよ！？ あなたたちを殺すかもしないのですよ？」

僕はそう言つも…

ドラえもん「なに言つてるんですか？僕にはそういう人間には見えませんよ。異常なことには慣れていますから。」

のび太「ドラえもんがいる自体が異常ですか。」

ドラえもん「のび太くん！ひどいよ……」

白峰「最もこんなゾンビのいる状況のほうが異常だしな。」

出木杉「あはは……。それは言えますね。」

聖奈「それに私たちを助けてくれたじゃないですか。」

静香「私もです。」

安雄「僕もだな。」

咲夜「それなのに嫌になれるわけないじゃない。」

秀人「わたしはいつでも優しい人の味方だぞ！」

龍輝「俺は言つたで。いつまでも親友だと。その言葉を撤回するつもりはないな。」

リア「俺はお前についていくぜ。そっちのほうが面白いからだ。」

舜乃「みなさん……」

うれしかった。今まで人間じゃなく悪魔としていわれてきたのに田

の前にいる人たちは僕を人間として見てくれましたから。さっきより目頭が熱くなりました。そこに…

美琴「大丈夫よ。舜刃君は悪魔として拒絶されてきたから私たちのもとから離れようとしたんだよね？でも大丈夫よ。私たちは人間として見てるし、拒絶なんかしないわ。ちゃんと信用しても大丈夫よ。

」

舜刃「美琴さん…………つう…」

あまりにうれしくて涙がでてしまった。

リア「あーあ……舜刃泣いちまつたぜ。」

舜刃「な、泣いていません。こ、これは田にガニが…」

秀人「いや、これは泣いていると見た。」

舜刃「秀人！う、うれしいんですよ。グスツ……」

僕は久しぶりに人の前で泣きました。みんなはからかってきましたが美琴さんが顔を赤くしているのが見えました。

美琴（舜刃君…………かわいい…………。）

不意にもその赤くなつた顔の美琴さんがかわいくみえてしまつた。この日生まれて初めて心から信用できる仲間を手に入れました。

第20話 信用（後書き）

NG集 その4

～絢乃との戦闘より～

星也「さて、そろそろだな。絶望を送りつか？」

シユバッ

秀人「あ…あのセリフにあの片翼の黒い翼は…まさか！？」

星也「そう、セフィロス…………！」

龍輝「やめろおおおおおお…………服装まで真似るなあああ…………！」

絢乃「ぐつ…うあ…？」

スタタンツ

星也「これで身動きが取れないよなあ～。さあ、トドメだ。」

バサアツ

秀人「な、なんだ！？今度は白い翼に生え変わったぞ。それにあのバスター・ライフルは…まさか！？」

星也「ターゲット・ロックオン…」

「オオツ

秀人「やめろ…やめるんだ魚住…！」

龍輝「あいつ魚住じゃないだろ！…おい星也！俺たちまで殺す気か！？」

星也「ツイン・バスター・ライフル…………！」

ドゴオオオ…

その後場に残つたのは星也だけだつた。

ヴァンパイアとの決別（前書き）

闇斗「おーー俺戦つてねーじゃん！」

ゼクセル「まあまあ、技はこくつか出てきているから。」

ブラック「クソ作者は気まぐれやでー。」

カムフラージュの決別

S-19e 閻斗

く、くわい。やつぱり街になんて来るんじゃなかつた。なんで毎回「女装おばさん」に追いかけられるんだよ！？マジでふざけんなよ…さあ、どうやって撒こうか？とりあえず路地裏だな。

ふう、なんとか撒けたぜ。そして、飯！飯！

「いたつー！」

? 「「うあー！」

路地裏を出たら、俺と同じくこの緑色の帽子をかぶつた男にぶつかった。

「つてーなー、氣をつけろよー！」

? 「なんだ？お前からぶつかってきたんだろー！」

俺が少し強い口調でそう言つと俺より3歳くらい年上で髪がツンツンの男が俺の胸ぐらをつかんでキレてきた。さつきぶつかった男の兄だろうか？

？「やめてよーお兄ちゃん！僕が悪かったからー。」

と弟さんが仲介するが…

？「いや、こんな奴はぶん殴つておかないと駄目だな。」

おいおい、弟さんが仲介してゐるにまだやめないうちか？

「3秒待つ。離せ。」

俺は命令口調で兄らしき人に言つた。

？「なんだとー？お前…」

ブンッ
パシッ

？「なつ…？」

ドゴッ

？「がつ…」

さあ、みなさん。お分かりいただけたであろうか？分からなかつた人のためにハイライトがでら解説。まず彼が右ストレートをかましました。いやーなかなかにいい拳ですね。しかし、俺はいとも簡単に左手で受け止めました。ここで彼が驚きの声がもれましたね。そのスキを逃さず彼の腹に膝蹴りをおみまいしてＫ・Ｏです。弱すぎだろ…。少し膝入れたぐらいで…。

? 「お兄ちゃん!」

? 「がつ……てめえ……」

まだやる気か? 無駄な…。

「やめとけ。これ以上はだらりとつても無意味だ。それに兄のくせにまた弟さんに仲介してもらいつつか?」

? 「ぐつ……。」

やつと食い下がったか。全く面倒くさいものだ。さて、どうで飯をすませよつか?

Sideヤマト

何なんだ? あいつは? 自分からぶつかっておいてあのふてぶてしい態度は? しかもよく見たらタケルと同じくらいの子じゃないか。そんな子に負けたのか…。なんか、ショックだな。しかし、あいつは何か裏がありそうだな。

タケル「お兄ちゃん! 前からガボチャのかぶりものをしたデジモンが!」

タケルが言うと前からガボチャのかぶりものをしたデジモンと戦闘みたいなデジモンがきた。

く、くそう。飯を食つたのはいいがまた「女装おばさん」に見つかってしまった。ホントになぜいつも見つかる？また、路地裏だ！あれを使わない手はない。な、なにい！？行き止まり！？ま、まずい！

女装おばさん「ハア…ハア…ハア…にがさないわよ。」

なに「ハア…ハア…」って！？マジでキモい…仕方がない！

「闇の霧。」

俺がそう言つと俺と女装おばさんの周りは黒い霧に包まれた。この霧は目に入ると一定時間視界が黒くなる。つまり、しばらくなにも見えなくなる。しかし、闇の力を持つているものや耐性がある者には効かない。そして、俺は「女装おばさん」から逃げた。…むつ、この闇の気配は……ヴァンデモンか。なぜいる？とりあえず行つてみよう。

行ってみるとヴァンデモンと一足歩行の狼のデジモンが戦っていた。さらに近づいてみると信じがたいものが落ちていた。パンプモンの

かぶりものだった。その近くには先ほど遭遇した2人がいた。

「お前ら……」のかぶりものは?」

タケル「パンプモンとゴッモンが死んじゃったよ…。」

俺はその言葉を聞いて怒りが満ちた。誰が…誰が殺した?

「ヴァンデモン! これはどうこうことだ! ?」

俺はパンプモンのかぶりものを手に持ちヴァンデモンに聞いた。

ヴァンデモン「…ふん。そいつらは私を裏切ったから始末した。問題ないだろ?」

なに言つてんだあいつは! ?人の仲間を勝手に殺しておいて問題ない? 大ありだろ? が! ! !

ヴァンデモン「そやつらは選ばれし子供だ。早く殺せ。お前ならすぐだろ?」

俺はそれに従わず手を銃の形にして闇を溜めヴァンデモンに向けた。

「闇の銃。」

俺がそいつと闇の銃弾がヴァンデモンに向かっていく。

ヴァンデモン「へへ…闇斗…じつこいつことだ! ?」

ヴァンデモンはなんとか闇の銃弾を避け俺に聞いてきた。

「そのままの意味だよ。あんたには失望した。簡単に命を奪いやがつて。ふざけんな！…俺はお前みたいな下劣な者は仲間とは認められねーな。お前との契約は破棄させてもらう…まず殺すべき者は選ばれし子供ではない。まず殺すべき者は…お前だ！ヴァンデモン！覚悟しろ…」

ヴァンデモン「お前も私を裏切る気か？よからぬ。まとめて殺してやるう。」

俺は闇を体に纏い、ブラックデジヴァイスからブラックアグモンを出した。

「ブラックアグモン！行くぞ…」

ブラックアグモン、ダークネス進化！…！…！…
…ブラックグレイモン！…！…

ブラックはブラックグレイモンに進化させた。

「ああ、行くぞ。世の中の平穏のために。」

そして、俺らはヴァンデモンに立ち向かっていった。パンプモンとゴッモンの仇討ちのため…。世の中の平穏のため…。

カムハトモソヒの決別（後書き）

次回は本当に闇斗が戦います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9652y/>

ドラえもん のび太のバイオハザード イレギュラーな者たち
2012年1月5日23時49分発行